ナツミ・シュバルツ嬢は友達が欲しい

ら・ま・ミュウ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ナツキ・スバルは死んでナツミ・シュバルツ（貴族）となった。死に戻りは無い！王選候補者でもない！それだけ！

目次

ナツミ・シュバルツ嬢は友達が欲しい ―― 1
プライドを捨てたナツミお嬢様 5 ―― 9
ユリウスとナツミお嬢様 ―― 13
魔獣 ―― 17
好意とは ―― 20
過ち ―― 23
使いどころのない情報網 ―― 28
エミリア陣営 ―― 32
両者、外枠を埋められる ―― 35
盗品屋 ―― 38
溺れる ―― 42
アナスタシアの野望 ―― 47
ナツミ嬢とユリウス ―― 52
井の中の蛙、大海を知らず ―― 56
番外編　剣聖のご加護 ―― 61
ただのエミリア ―― 67
魔女の怒り ―― 70
美味しいお酒も量による ―― 73
番外編　孤独なキング ―― 80
番外編　楽しいキング ―― 89
ユー愛 ――
ナツミシュバルツはトモダチが、ホシ

イホシイホシイホシイホシイホシイ 93
ナツミ・シュバルツは友達が欲しい 98
おまけ　魔女の茶会
屋敷精霊の愛読書 ―― 113
歪な関係 ―― 117
友達という鎖 ―― 123
友達の終わり／束縛された願い 129
菜月家の朝／俺だけが知っている 136
十回目 ―― 141
想うということ ――

ナツミ・シュバルツ嬢は友達が欲しい

――――俺の名はナツキ・スバル。無知蒙昧にして天下不滅の無一文！

…だったんだが、コンビニ行く途中でトラックに撥ねられ目が覚めたらあら不思議！

「お喜びください！可愛い女の子です！」

最近流行りの？

異世界転生ってやつで、女の子になっちゃったわけよ

名前はナツミ・シュバルツ。何で異世界に〝シュバ黒ルツ〟ってドイツ語名がある理由は分からんが、兎に角アレだ。

……無茶苦茶孤立した。

親御さんの集まりみたいな茶会に参加して、小さい子は近くで遊んできなさ～いって、きゃっきゃっきゃっと戯れる中、俺だけがマザーの膝上でふんぞり返ってお菓子を頬張っている。

「まぁナツミ様はお母さんっ子なのね！」

「うちの子は、中々かまってくれなくて羨ましいわ」

あー、はいはい。お世辞ですね（わかりマス）

前世引きこもりな社会不適合者は、こんな歳になっても友達一人作らず親のすね齧って生きているんですよ。
性の戸惑いってやつもあるけど、同世代の奴と話すのがトラウマって……今はよくても後五、六年もしたら絶対陰口案件だわ。
最低でも……一人ぐらい友達作らねぇとヤバイな。
マザーの豊満な胸に頭を預けてお菓子を食べるナツミ・シュバルツは焦りを覚えた。

「レディ、よろしければ散歩などどうでしょう」
あぁん？誰だ、この後頭部に伝わるパイ乙の感触を妨害せんとする不届き者は……
て、ユリウスやん。
「――行く！」
お菓子をパクっと飲み込んだ俺は手をとった。
他の奴なら付いていかねぇけど、こいつ七歳の子供の癖して魔法使えるめっちゃすごい奴なんだよ。
キラキラして手のひらから炎出したり氷を作ったり、見ているだけで飽きないわ、一

度ねだってみたら俺にも教えてくれる普通に良い奴だし、異世界に来て『魔法』とか我慢出来る訳なくね？
「ゆりうす！きょうは、なにをみせてくれるんだ！」
「そうですね、イア」
　ユリウスの回りをクルクルと動く微精霊がナツミの前で止まり、首を傾げるナツミに彼は離れた場所にある石を指差して一言。
「ナツミ様あれに人差し指をお向け下さい」
「おおう？」
　言われるがまま指を向ける。するとイアと呼ばれる微精霊がナツミの人差し指にくっついた。
「はう!?ゆりうす！こ、これって!?」
「――ええ、ご想像の通りかと」
　前世オタクな俺は直感する。
　――絶対『霊丸』的な奴やないかコレ!!!
「れい…がん！」
　勢いよくナツミの人差し指から射出するイア。
　石に突撃してドカンッと派手に爆発しやがった。

「ふわあああ!!!」

オタク死す（イアは死んでなかった）。胸の高鳴りを抑えられないナツミはその日、熱を出した。

「ゆりうす……まじお前やべぇわ……さいこうだわ」

――てか、よくよく考えたら友達いたわ。（ユリウスだけだけど）

プライドを捨てたナツミお嬢様

「素晴らしい！この歳で語学を修めてしまうとは、ナツミ様は天性の才能をお持ちなのですね！」

家庭教師のおば様が、誉めちぎる。

……そりゃー、３歳で字が書けるようになれば凄いと思うわな。俺的には一年近く丁寧に教えてもらってやっと覚えられたって言う……喜びよりも、ほっとした気持ちが強いんだが、一年近く赤ん坊やってると結構忘れてる事が多くて微妙に恐いんですわ。

「つぎ、をおねがいします」

せめて、この世界の基礎知識ぐらいは修めて安心しておきたい……ん？

別にボッチで、することがないとかじゃないから。

……おば様？何黙っているんです。そんな悲しい物を見る目を向けないで……いや、本当に違うから！ボッチじゃないんです！

コンコン

「お嬢様、ユリウス様が――」

おしっ！良いところに来たマイフレンド！

やっぱ小さいお子さまは部屋で勉強せず、お外で遊ぶべきだよな！……と言うわけで、おば様？……あ、いいんですね！

――スバル行ってきます！

「あらあら、ユリウス様が来た途端に」

「ナツミ様ったらおませさんね！」

「ナツミ様、今日は何を披露致しましょうか」

我がシュバルツ家の保有する未開拓の森の広場で、切り株に腰かけたナツミと舞台役者のように振る舞うユリウス。

テレビやゲームもない異世界で、下手なマジックの百倍は面白い〝コレ（魔法ショー）〟を独占してて良いもんなんですかね～奥さん。

「イアのあれやりたい！」

「それはいい、彼女も貴女の事を好いているようですから」

ユリウスが右手の指を軽く弾き、一つの淡い輝きがナツミの周囲を飛び回る。微精霊のイア。

子猫のようにナツミにじゃれつく彼女は可愛いらしく

そこで、ナツミはふと思う。

「ゆりうす、こんなところで、うったら火事になるんじゃねぇか？」

ナツミの疑問にイアが震える。ちょっと可愛いと思ったのは俺とユリウスだけの内緒だ。彼は顎に手を当てて、七歳児の頭脳を振り絞り上空に撃てば問題ないのでは？と結論を出す。

流石だ。ユリウス！（七歳児に頭脳で負けた瞬間である）

「れい……がん！」

ナツミは上空へ指を向け、漫画の主人公が必殺技を放つが如くたっぷりと時間を溜め……イアを射出した。

そしてお預けを食らうと思っていたイアさんはテンション高めに、いつもより高めに昇っております。

3……2……1

ドカン

「えくすぷろーじょん」

……綺麗な花火だ。
前髪をかきあげたナツミ嬢はクールに呟く。

ガルルル　ガルルル　ウォーン

……何か、狼の遠吠えみたいなのが聞こえた気がするが気のせいだよな？

ユリウスとナツミお嬢様

ユリウスにとってそれは偶然の連続だった。
最近何かと噂の種となるシュバルツ家の令嬢ナツミ・シュバルツ様。
少々目付きが鋭いのが難点だが、万人が振り返るような愛らしい容姿に、３歳という幼い年齢ながら趣味は読書だという、勉学にも積極的な彼女。
家柄やその幼くして光る才覚からみても近い未来、国の重要な役職を任される事は間違いないだろうと話題になっている。
将来有望な騎士として頭角を顕しつつあるユリウスが、一度会っておいて損はないと親族同士の顔合わせで会話をすることになった。
「…こんにちは」
「ご紹介に与りました、ユリウス・ユークリウスと申します」
「……そうか……いえ、そうですか。ご丁寧にどうも」
「はぁ……」
微妙な空気が流れる。
このユリウス、自慢ではないが持ち前の美貌が災いし、ひと度女児の視界に入れば黄

色い悲鳴を上げられてきた。
……つまり、自身にこれっぽっちも興味がない相手と会話したことがない。
「とりあえず、これたべます?」
「…有り難く頂戴いたします」
初の顔合わせは、殆どを無言で過ごし、ナツミ嬢（3歳）の気遣いにこれ以上ないほどプライドをズタズタに傷つけられたユリウス。
そんな彼が、頻繁にシュバルツ邸を訪れるようになったのは自然な事だった。
「ナツミ様、バラ園に興味はございますか?」
私の知り合いの庭師が――「ごめんなさい、きょうみないです」
「――そうですか」
「ナツミ様、巷で評判のお菓子を頂いたのですが「甘いものはちょっと」」
若さ故、あまり物事を深く考えず、思い付いたまますぐ行動に移してしまうユリウスとそれを冷たくあしらうナツミ嬢。
初めのうちは、「女性に気を使わせてしまうなど騎士の恥だ。恩を受けたならば返さなければ」そんな気持ちで動いていたユリウスだが、あんまりにもナツミ嬢が振り向かないので、だんだんと意地になってきた。
花やお菓子、あの騎士は女性に人気だの、女性の好む騎士と姫の禁断の恋物語など、少

しでもピンっとくればそれらをもってナツミの下に訪れる。
ナツミ・シュバルツは冷たくあしらった。
何故だ。ユリウスは嘆く。
魂が男だから、花やら菓子やらで喜ばないのだろう。
微精霊は思った。面白そうだから黙っていよう。準精霊達は話し合った。
ところが、世話焼きのイアさんがある日、ユリウスに語りかける。
魔法をみせてみたらいいんじゃない？
ユリウスは女性がそんなものをみても何も喜ぶことはないだろう。一瞬そう思ったが、ナツミ嬢はまだ三歳児だ。中性的な年齢だし、もしかして……
ダメ元でナツミの前にやって来たユリウス。

「…精霊よ」
「ふあああああ!!!!!」
ナツミが目をキラキラと輝かせ、満更でもない微笑を浮かべるユリウス。

ユリナツ最高！

イアさんは腐っていた。

魔獣

魔獣。

それは人々の平和を無下に脅かす悪しき存在『魔女』の眷属であり、魔女教と呼ばれる魔女に魅入られたカルト集団を除けば、魔女の恐怖を最も象徴する化け物だ。

ユリウスは現在、歴史などを中心に勉学に励んでいるが、古い文献を漁れば漁るほど、度々現れる奴ら。

犬や水性生物など、自然動物を邪悪に歪めたような外見を持ち、人を憎悪をもって貪るような相容れない生物。その強さは多岐あれど、時に国すらも滅ぼす事がある。

「ガルルル」「ガルル…」「ガルルルル」

「ゆりうす…これ、やばくね？」

「ナツミ様。私から決して離れないで下さい」

気づいた時にはもう遅い、ユリウスとナツミ嬢は魔獣の群れに囲まれていた。

恐らく森の結界が緩んでいたのだろう。運が悪かったといえる。しかし、奴らをここまで呼び寄せたのはイアの爆発だ。

ユリウスはナツミ嬢を背にして歯噛みする。

何と浅はかな！
おまけに、今のユリウスに武器らしい物はない。
微精霊達はいるが、騎士として修行を始めたばかりのユリウスは精霊術士として未だ未熟だった。
精々、火をおこし水を出す程度。この数にそれを放っても焼け石に水である。
「――こいっ！」
「なっナツミ様!?」
ジリジリと距離をつめる犬科の魔獣達。
冷や汗をたらしながら、打開策を模索するユリウスであったが、突如ナツミ嬢はその腕を引っ張り、大きな樹木に向け走り出す。
「しってか！ゆりうす！犬のつめは丸いから木登り〝へたくそ〟なんだぜ！」
「そうか！ナツミ様失礼！」
「この、木登りスバちゃんと言われた俺の実りょ…うひゃ!?」
意図を察したユリウスはナツミ嬢を両手に抱え、一般的な貴族の屋敷よりも一・五倍ほど高い木の頂点まで跳び上がった。
「うへぇ…やっぱ〝いせかい〟のちょうやくりょくばぐってるわ…」
ナツミ嬢が恐る恐る下をみれば、木にしがみつくも滑って落ちる魔獣達が。

「何とかなりましたね」
「そうだな…よし、おろせ」
「なりません」「おーし、ゆっくり……は？」
「下ろしたら落ちてしまうでしょう？」
「……は？」
　ナツミ嬢は、真顔になる。
「おまっマジでおろせよ」「なりません」
「おろせよ！おーろーせーよ！」
「なりません」
「おろせぇ!!!こどもあっかいすんなー！」
ガロオオオ!!!!
　ナツミ嬢の言葉に被せるように、地面が揺れる。
　ユリウスが何事かと下を注視すれば魔獣の一体が膨れ上がり…ユリウス達の眼前まで大きくなった。
「「ふぁ!?」」
　その瞬間……俺たちは思い出した。壁の中に捕らわれていた屈辱を。
「いちなんさってまたいちなん…どころじゃねぇ、にげろー！ゆりうすぅぅぅ！」「了解

しました！」

好意とは

あれから何とか逃げ延びた俺たち。
ユリウスも俺も傷だらけで、お互い良く生き残れたもんだと笑いあった。

しかし、
……俺の手首、魔獣に噛まれたのはユリウスも同じだが、〝呪い〟を掛けられていたとか何とかで、治癒術士の姉ちゃんが気づかなければ今頃ポックり逝っていたらしい。
ユリウスの家柄は地位的な意味で俺よりだいぶ低かったらしくユリウスの家の本家の奴らはそれにカンカンで、ユリウスは俺の目の前で罵声を浴びせられ激しい折檻を受けていた。
「まてよ！ゆりうすにたのんだのはおれッ…わたしの責任だから！ゆりうすは何もッ！」
元はと言えば、俺も悪いんだし弁解ぐらいさせて欲しかった。いや、するべきだったし俺は声を上げたんだ。
だけど、あの野郎……

「…何で、あそこで微精霊使って黙らすのかねぇ～」
「うひゃー、フェリちゃんこれにはユリウスに同情せざるおえないにゃ」
「あぁん？どういうことだよ」
　十五年の月日が経ち、俺もアイツもすっかり大人の仲間入りを果たした頃。
　言葉使いやマナーがなんだと五月蝿い連中とは違い、素の状態で話せる数少ない友人の一人フェリスは呆れたように首をふる。
　ちなみに、言葉使いどころか見た目、仕草共に完璧な美少女であるこいつは男である。前世でいう男の娘という奴だ。
　ユリウスと同じく、親戚同士の顔合わせで出会い、すぐに打ち解けた俺達だが、彼方には騎士という立場があるため、いくら訂正しようと変えようとしない堅苦しい話口調に、少しムカムカしていた。
　まぁクルシュさんの騎士様に選ばれて…気づいたら今みたいになったんだが、こいつがユリウスに同情？何の冗談だ？
「いいですかナツミ様、ユリウスは貴方の事を」
「おいっ止めろ。お前にまで堅苦しくいられたら痒すぎて死ねる」
「……何か、二人の仲が進展しない理由が分かった気がするにゃ」

フェリスは一人納得し、冷えきった紅茶を飲む。

「ナっちゃんって、ユリウスが未だに敬語使っているのはどう思ってる？」

「――嫌がらせ？」

（うにゃ……コレは脈なしにゃ。第一ナツミ様がユリウスに好意を寄せるイベントなんて欠片もないのに、あのバカは何一人勝手に納得してるんだか）

フェリスは一人の男を思い浮かべてため息をついた。

薄々気付いてはいたが、やはりナツミ嬢はユリウスの事を完全に友人と割りきっているのだろう。

しかし……あのバカはナツミ様が未だにフリーな事をいいことに完全に脈ありだと思い込んでいる。

『騎士として仕える事が出来なくなった以上、私はナツミを娶るべきなのでは？』

真顔であんな事を言ってきた時は必死に堪えたものだが、今度あったらぶん殴ってやろうかな？

フェリスは思った。

過ち

――夜分遅く、机に積まれた大量の書類から目を逸らしたナツミ・シュバルツは背もたれに体重を掛けて息を吐いた。

「はぁ……やっと終わった」

この世界に転移……いや、転生してから十七年。

元引きこもりの俺が言うのも何だが、公務員ってブラックすぎね？

この世界は労働基準法やら定時とかの概念がないから余計にそう感じるだけかもしれねぇけどよ、俺……裁判官だぜ？

何で、騎士様方の武具の購入金、設備等の補修代、予算を細かく計算して赤字・脱税防止などに務めなければならんのだ。出来る出来ないは兎も角、専門外だぞ。

「……いくら、深刻な人手不足だからって……このままじゃやってらんねーー！」

「それは仕方のない事だよ、スバル」

ふわりと肩に手が置かれる。

突然の事にビクリと震え、そして紅茶の芳しい匂いが鼻腔をくすぐり、久しく呼ばれていなかったその名に気分が高揚していくのをナツミは感じていた。

「女性の部屋にノックもなしに訪れるのは無作法だったかな？」
振り返ると赤毛の青年が二組のティーカップとクッキーの乗せられたお盆を片手に持ち、悪戯が成功した子供のような無邪気な笑みを浮かべている。
「ハッハッハ……やりやがったなぁ～ラインハルト君。いっくら懐の広いナツミ様と言えど今日という今日は許さないぞ？
お菓子でもつまみながら、お説教といこうか！」
「それは困ったな。騎士として断る訳にはいかないじゃないか」
「ひゅー！今夜は飲むぜ、酒持ってこいー！」
髪紐をほどき、自分で言いつつ戸棚からワインボトルを取り出すナツミ嬢。ラインハルトと呼ばれた青年は紅茶が冷めないよう細工をして……小さな宴が開かれる。

「――――ハッ!?」
目が覚めた時、ナツミ・シュバルツは自宅のベッドの上であった。
――昨夜の記憶が全くない。

二日酔いのような頭痛と酷い渇きを覚えてナツミ嬢は水を呷る。
「女に産まれて十七年。己の危機管理能力の無さには一周回って誇りすらもっちゃいるが、記憶がないのは不味いだろ……俺。」
ため息。
女に産まれてから男に興味など一切抱いた事はなく、男としての感覚が根強く残っているナツミ嬢だが、男の前で記憶を失くすほど酔っ払う事が、どれ程危機感が足りていないと言われるかは理解している。
これが、聖人騎士のラインハルトだから良かったものを、残念イケメンのユリウスなら魔がさして…流石にねぇな。

ナツミ嬢は、今日が休日であることを思いだしパジャマに着替えてもう一眠りしようとベッドに手をかける。
枕元には真っ黒な本が添えられており、寝ぼけて仕事場から持ち出してしまったのかと表紙を見て「…傲慢？」数枚捲ってみたがよくある宗教本みたいな文章が書きなぐられており、重要そうには見えず明日返しに行けばよいだろうと、テーブルの上に放置した。

使いどころのない情報網

「ふむ、残念ながら貴方様は選ばれなかったらしい」
「……ん、そうか」
場所は宮殿。休日出勤ヨロシクのブラック企業に勤める形だけ裁判官令嬢と言えば俺の事…へいっ！皆のアイドルっナツミ・シュバルツ様だぜ。
今日は王族が断絶し、石碑に記された四人の選挙者が次代の王を決める王様選挙に参加する…だったか？
その候補者かどうかを確かめるべく俺に仕事を押し付けまくる糞爺どもに呼び出された…んだけど変な石を握らせられて資格なしと判断されたらしい。
「――うっそ…」
「馬鹿なっ！彼女が王の器でなくて何と言うのだ!?」
フェリスとユリウスがめっちゃ後ろで面白い顔してる（ワロタ）
何かちょっと前からコイツらとクルシュさんには謎のライバル宣言を受けて仕事の都合で領地を訪れる際、何度か書類上問題ないにも関わらず通してもらえない等のいざこざがあったんだが……もしかしてコイツら、俺が王選なんちゃらに選ばれるとか本気

で思ってたのか？

こちとら前世ニートの社畜令嬢だぞ。選ばれる訳ねぇだろ。

「まぁ仕方ないですね。お……私ただの軽犯罪専門の裁判官ですから。もう終わりでしょう、仕事が立て込んでいるので帰っていいですか？

……次呼ぶ時はいきなりではなく事前に話を通してからにしてください。こっちは貴方々と違って暇じゃないので。」

冷めた目で爺どもを見下ろし、踵を返す。

その時、震える右手をそっと諌め、歪みそうになる顔を下唇を噛んで必死に抑えた。

…実は悔しかったのか？

（クククッ……あれだけ言ったものの内心は真逆、胸がすく思いだ。）

――否である。

ナツミ嬢の気分はとても高揚していた。

正直、職場から百八十度離れたこんな所に呼び出されてうんざりしていたが、上司に嫌みも言えてガス抜き出来たしライバル宣言の理由も分かったり、数少ない友達を失うような事にならなくて心底ホッとしている。

「……ナっちゃん」

「ナツミ…様」
あぁ、何て言う辛気くさい顔をしてんだか。まるで高校受験に落ちた子供にどう接していいか悩む親のようではないか。
「大丈夫だ、オレに王様は柄じゃねぇ」
小さく二人にそう言って宮殿を後にする。

すると自分の前に立ち塞がる麗人が一人。
(俺の相棒パトラッシュとの間を引き裂くようにクルシュさんが立ちふさがっているんだな。どういう事?)
クルシュ・カルステン。カルステン公爵家の当主にしてこの王選の大本命とされている凄い人。
シュバルツ家なんてちっぽけな家柄の俺に何かと目にかけてくれて、昔は頼りになる彼女をよく姉上と呼んで慕っていた。
だけど、最近何やら不穏な空気を漂わせ、さっき言った通りの嫌がらせも受けて、ほとんど顔をあわせてくれないものだから……あ、嫌われたかなと少し悲しんでいたのだ。
「……その、なんだ。貴殿と王位を争うことは間違いないと思っていたが故に、警戒し過

ぎていた。一人の友として謝罪したい」
　申し訳なさそうな顔をして頭を下げるクルシュさん。
　律儀だわ……ＫＭＲ（クルシュさんマジ律儀）
　こうやって自分が悪いと反省してちゃんと謝罪出来る大人はマジ尊敬出来る。
（俺が候補者から外れたから謝罪したのか？）
　いや、俺は候補者じゃないと言われてすぐ城を出たし、高台からクルシュさんがパトラッシュに威嚇されて戸惑ってるキャワイイ姿も…丸見えだったんだわ（脳内保存余裕）
　元々謝罪するつもりで此方に来たんだろう。
　……はぁ～尊い。クルシュさんマジ尊い
「応援してますクルシュさん！」
「……え？あ、あぁ私も貴殿を」
「ォ…私は違うみたいです！」
「え？」
「ナツミ・シュバルツはクルシュ陣営に全面協力します！」
「……え？」
「白鯨討伐の際は資金提供は惜しみませんし、何なら腕のいい商人も紹介しちゃいます

よ!・オットーていう奴なんですけど」

「待て、何故!・貴殿がその事を!?

……いや、流石、シュバルツ家の懐刀と言った所か」

男勝りな笑みを浮かべ、事楽しげに語るナツミ嬢にやはり私は間違っていなかったと冷や汗を流すクルシュ。

伊達に社畜極まっていないという訳か、

幼き頃は神童と謳われ亡き王族の仕事の過半数全てを一人で肩代わりする彼女の情報網は予想通り侮れぬ物であった事をたった今再確認した。

エミリア陣営

「シュバルツ家の支持を得ることは重要だーぁよね」
「こればかりはベティも賛成かしら。あの娘、癪には障るけど優秀なのは間違いないのよ」
　主人のロズワールと禁書庫の守る幼女精霊ベアトリスはある日の晩餐、銀髪のハーフエルフや双子のメイド達を除いて珍しく二人きりで食事を取り一人の令嬢について意見を出し合っていた。
「おやおやーぁ、君がそこまで評価するとは本物なのか。これは本腰をいれて囲い込まないといけなーぁいかな？」
「でも、それは不可能なのよ。あの娘にはクルシュ陣営やアナスタシア陣営が既に目をつけてる。」
　幼い頃から神童と一目おかれ、将来は王族が携わるような高い役職に就くに違いないと、両親や家庭教師の有難いご協力によってどの職についても気苦労することのないよう数多の学問を修めた彼女。
　経済学や心理学に帝王学や薬学など……思えば、数年前にその才能と努力に反して休

みが多いことだけが取り柄の給料の安い軽犯罪専門の裁判官に収まった時にはそれはそれで話題になったものだが、真に彼女が我々王選候補者達の目に止まったのはあの原因不明の病が流行し、王族が死に絶えたばかりの時だった。

彼ら彼女らは王族なだけあって幼い頃から英才教育を受け国の重要な役職に就く者が多くいた。

国は一斉にその重要な役割に就いた働き手を（引き続きも無しに）失う事になり、その影響は瞬く間に広がり出す。

「どうなってんだ！申請だして、もう一週間だぞ！」

「もっ申し訳ありません!!」

「水路が汚れちまって船が進まねえんだ！清掃の兄ちゃんは何で来ねぇんだよ！」

「それは上層部が資料を紛失し雇用契約の一時的な破棄を――」

損失は日を逐うごとに膨れ上がり耳を塞ぎたくなるものであった。

賢人会は急ピッチで人材育成に取りかかるが、全ての引き継ぎが終了までにルグニカ王国が持つかどうかは半々であり、王選とか悠長な事言ってられねぇとルグニカ全体が頭を抱える中、白羽の矢がたったのは鬼才の少女。

ナツミ・シュバルツ嬢である。

「今じゃ何もかもがあの娘に任せっぱなし、あの娘の協力を得るという事はそのまま国

が味方になるような物なのよ。」
「王国が彼女のような人材を今まで腐らせていたのはある意味幸いだったね。」
「ふんっ馬鹿馬鹿しいかしら。今じゃ王族が携わっていなかった関係ない役職まで押し付けて働き殺す気かと疑いたくなるし、賢人会は自分たちが楽しようと押し付けてるつもりなのかもしれないけど。」
「もう明らかーぁに、ナツミ様の方が権力は上だよね」
　ナツミ様を見つけた賢人会はこれ幸いと育成までの期間、文字通り彼女を使い潰す気であったが、あまりにも彼女に仕事を押し付け過ぎた。
　今では下手をすれば……当時の王族の誰よりも彼女の権力は大きい。
　武器を買うにもナツミ様に許可を、兵を動かすにもナツミ様の許可を、輸入品の書類にサインはナツミ様が。
　使い潰される所か持ち前の反骨心を爆発させ、忙殺されそうな業務に耐え続ける彼女は超効率のレベリングが如く地位や民意が天井知らずに上昇し続け、『賢人会』の総意よりも彼女の一言の方が重いという三権分立も真っ青な現状である。
「丁度明日、王選の決定を通達する催しが開かれる。ナツミ様も出席なさる筈だ。そこで私は彼女を我が陣営に率いれてみせるよ――何としてでもね」
「……そう。」

その後、両者は口を開かず晩餐は静かな物となった。

両者、外枠を埋められる

「――なぁユリウス」

ルグニカ王国のとある喫茶店。そこそこ良い間取りの席に腰かけるアナスタシア・ホーシンは五秒ほど、自らの騎士であるユリウスの顔をじっくりと覗き込み

「ウチはなぁ、めんどいのはあんまり好きやないけど、お金の為になるんやったらある程度は待ってもいいかな～って思うんよ」

「流石はアナスタシア様。貴方様の商人として培われたご検眼は――」

「あっ今そういうのはいいから」

話終わる前に口を挟まれたのが不満だったのか、その形のよい鼻を不服げに鳴らし、すげなく言葉を切り捨てる彼女。

主の不興を買ったユリウスは少しバツの悪そうに顔を歪め、直ぐに謝罪を口にするよう顔を上げるが「――待った」アナスタシアからのストップに寸前で押し黙る。

「ウチが聞きたいのは一つやねん」

何なりと。このユリウス、嘘偽りなく答えてみせましょう。

……口に出すのは止められた為に力強い瞳で訴えるユリウス。

「アンタぁ、いつナツミ嬢ちゃんと結婚するん？」
「……！」
予想外の質問に動揺を隠せない。
ユリウスは風通しのよいその喫茶店が突如として灼熱や極寒の地にでも陥ってしまったのではないかと錯覚し眩暈がした。
「アンタの事やから、律儀に童貞守ってるんやろ？
ウチ……自分の騎士が童貞ですーって恥ずかしくてお天道様に顔向けできひんのよ。それにナツミ嬢ちゃんもいつまで経っても愛しのユリウス様がアタックして来いひんから悲しくて悲しくて枕濡らしてたりするんとちがうかな？」
顔が真っ赤になって真っ青になる。
羞恥と困惑。ユリウスの心の中はぐちゃぐちゃ――だが、この質問はアナスタシアのみならずナツミ嬢とユリウスの関係を知る者達からすれば気になっている事でもあった。
彼女が言わなくても誰かが言ってた。
案外、フェリス辺りが拳を鳴らしながら明日あたりにも乗り込んで来るかもしれない。
だったら自分が一番初めに聞いてやろう。この情報は高く売れるに違いない。

彼女にとって相手のプライバシーを過度に侵略する行為は敬遠する物かもしれないが、それとこれとは別。何より人様の恋事情という物はいつの世も話題性を持つ。
「ルグニカ王国の影の女王様と幼馴染の騎士…良いやないの。萌えるやないの～其処んとこどうなん？キス、とかもうしたん？」
「いえ……嫁入り前の女性とそのようなふしだらな事は……その、あの……」
「えらい可愛らしい反応からして…まさかまだ手も繋いでない!!」
「いや！手どころか抱き上げた事ぐらい……ハッ!?」
「なるほど、な～あるほど～！これは本が分厚くなりますなぁ！」
ユリウスは自分が乗せられている事に気付いて口をつぐむがもう遅い。鼻息を荒く恋も知らない生娘のように頬を薄桃色に染め上げた彼女はメモ帳に筆を走らせ瞬く間に店を飛び出した。
ユリウスは慌ててそれを追うが――彼は知らない。
ナツミ嬢と自分の物語がこっそり恋愛小説として綴られホーシン商会の売上向上へと大きく役立っている事を。

盗品屋

事今日に限って、道に迷ってしまうのは己の悪運からなのか。
日頃の行いは国民の生活を豊かにする素晴らしい物だと言うのに、納得がいかない。
こちとら半年以上の休みを削って睡眠時間すら五日に一回だと言うのに、やれ国の最高責任者として顔を出せやら、ついでに仕事を置いていく図々しさとか……
「私(あたくし)、決めましたわ！賢人会は今日をもって解散とさせます！」
「おおー！やれやれ！ついでに俺たちの給料増やしてくれー！」
「あの無能どもに鉄槌を！」
何年経っても及第点すら貰えない貴族口調を思いっきり崩して冗談半分、半分本気、ナツミ嬢はビールジョッキを片手に泡髭を拭った。
「ひっさしぶりだな！爺さん！店は繁盛してっか？」
「盗品屋にあるまじき大繁盛じゃわ！」
ハゲ頭の巨人――ロム爺は、俺たちからすれば立派な中華鍋を玩具のように指先で操り、ワシャワシャ食材を混ぜながら顔を真っ赤にしている。
「フェルト！あのクソ有り難てぇ迷惑な女王様に野菜炒め持ってけー！」

「たっく、いつからアタシはこの店のウェイターになったんだよ」
　金髪の小柄な少女――フェルト。
　おおよそ飲食店のウェイターには見えない何日も洗ってなさそうな服に赤マフラーをたなびかせる彼女はピリピリした匂いが鼻腔を擽る野菜炒めをナツミが腰かける卓上の上に下ろした。
「ほらよ、姉ちゃん」
「お、サンキュ～フェルト」
「うわっ……アタシが言えた義理じゃねえけど、姉ちゃん最後に風呂入ったの何時だ？　何かインク臭ぇ」
「マジかよ。お前に言われるとかもう終わりじゃん」
　鼻を詰まんであからさまに臭うというリアクションをとるフェルトに、これでも湯浴みの時間は毎日取るようにしているのに……と、腰辺りまである黒髪に鼻を近付けてナツミは顔をしかめた。
「確かに……お前ほどじゃねえがヤバイなこりゃ。城に行く前に気付けてよかったぜ」
「姉ちゃんは一々アタシを貶さねぇと会話も出来ねぇのか!?」
「ハッ何たって俺はこの国の最高責任者（仮）だからな。嘘は吐けねぇよ」
　鼻を鳴らし野菜炒めをフォークで掻き込む。フェルトはまだ何か言いたげだったが

爺さんのお呼びが掛かって退散しちまった。
「……しっかし、手付かずだった貧民街の開拓がここまですんなり進むなんてな」
小さい頃にはよくここを訪れたが、あまりに様変わりしていたモノだから、この店を見付けるまでここが貧民街だと分からなかった。
人は活気に満ち、廃屋は潰されてあっちこっちで新築物が建造される、何というか…金山の回りに人が集まって街が出来るっていう古いアメリカ映画の開拓地みたいな感じ？
余裕が出来た分の予算の大半は、前世で齧った偉い政治家さんの考えを丸パクリして貧民街の開拓資産に回していたけど、まさか盗品屋が飯所になってるなんて思いもしなかったぜ。
「爺さんの飯はまぁまぁだけどな」
「余計なお世話じゃ！」

溺れる

前々から賢人会が自分の事を快く思っていないのは分かっていた。
いや、浄水場の管理代行とか害鳥対策の責任者など。王族が携わったとも直ぐに替えを用意出来ないとは思えない仕事の数々を大量に押し付けて、過労死や大きな失敗でもさせて望んでもいないのに勝手についてきた権力を削ぎ落としたい気持ちは嫌というほど理解出来た。
「申し訳ありませんボス。『腸狩り』でしたっけ？
良いところまでいったのですがまさか吸血鬼とは思わず、切断された両足をくっ付けて姿を眩ませました。
あ、見逃した訳ではありませんよ？中々の美女ではありましたが、吸血鬼を抱く趣味はありません」
「余計な情報ありがとうセシルス」
文官達は仕方ないとして騎士の一人も護衛が付かない事に疑問を抱かないほどナツミ・シュバルツは耄碌していなかった。
只でさえ間接的な妨害を繰り返していた彼らだ。いざ、暗殺者を送り込んできたとし

ても違和感はない。

そして異世界転生も安定しない職場環境もナツキ・スバルは一度も願った事はなかった。

……ふざけるんじゃねぇ。賢人会の好きなようにさせてたまるかと奮起して護衛集めを始める。

しかし、個人で護衛を見繕おうにも賢人会の根回しからか懇意にしている騎士達からやんわりとお断りされ、ユリウス達は王選候補者の騎士だから呼べる訳もない。

ラインハルトは最近なんだか忙しそうだったので声を掛けていない。

「あれ、私の人望なさすぎ!?」

ルグニカ王国にナツミ嬢の味方はいないのか。

思わず頭を抱えたナツミの護衛問題に白羽の矢がたったのはヴォラキア帝国である。

取り敢えず身分がしっかりしていて其れなりに強ければ申し分ない。ナツミ・シュバルツ嬢は、カララギから来てるんだし彼方を呼んでも問題ない筈だと、暫く近辺警護をしてくれる人材派遣を申し立て――そして訪れたのが、セシルス・セグムント。

ヴォラキア帝国最強の戦士、『九神将』の筆頭。　一将の位を与えられた『青き雷光』

早い話、ヴォラキア帝国版のラインハルトである。

「スッゲエのが来ちゃった!?」

飄々とした男だから無難な奴なのかと思えば……だ。
「閣下が貴方という存在を正当に評価した結果ですよ？
もし、亡命する気があるなら連れてこいとも言われました。厚待遇で迎え入れるそうです。」
「……ちなみにご給料と休みのほどは？」
「1日八時間労働。完全週休二日制。祝日休み。有休３０日。給料は僕と同じぐらいですね。ボーナスはその五倍です。」
この時、本気で亡命しようと思ったのは内緒である。

（ナツミ・シュバルツさん…王国の大混乱を一人で建て直した英雄か）

銀色の髪の少女が一枚の新聞を見つめ城を見上げる。
「ねぇパック。こんなに立派な人が王選候補者に選ばれないなんておかしいと思わない？」
「そうだね～リア以上に王様に相応しい子なんて想像も出来なかったけど、家柄も優秀、才能や努力はピカ一。さらに先進的な技術の革命児と敬われ老若男女に好かれるこの子はまるで王様になるために産まれてきたように見えるよ」
銀髪の少女の肩で欠伸する灰色の体毛をした子猫。大精霊のパックは新聞の見出しを突っつき「それにリアほどじゃないけど人間にしては可愛いし」と付け加える。
「もうっふざけないの」
リアと呼ばれた少女――エミリアは頬を膨らませ恥ずかしそうに顔を赤くした。
「エミリア様。間も無く式典が開始します」
「えっ、もうそんな時間!?
ラム、ロズワール、急ぎましょ！」
「そぉーだね」「はい」
道化のようなメイクの男性と桃髪の少女を引き連れ、彼女は城を目指す。

アナスタシアの野望

ナツミ・シュバルツ嬢が国民の期待と賢人会のパワハラ激務より押しつぶされる先の未来。これは王選開始を告げる半年ほど前の話だ。

「――おっし、終わった！」

机上に並べられた二つの紙束を持ち上げ、『可』と書かれた箱に投げ込み、その他をゴミ箱に投げ込んだナツミ嬢は腕を伸ばして肩を回した。

「そろそろ、昼休憩しよーぜ！」

「「はいっ！」」

「あっ、このゴミ箱に捨ててある書類は早めに焼却処分しといてな。多分大丈夫だと思うけど情報漏洩とか怖ぇし」

彼女の補佐として付けられた新人の文官達が気持ちの良い返事を返してくれる。

俺様口調を何とも思わない出来た後輩達だ。

「じゃっ適当に外で済ませてくるわ」

「「いってらっしゃいませ！ナツミお嬢様!!」」

（…やけに元気な、今日なんかあったっけな？）

ナツミ嬢は自らの知る普段との変わりように少しだけ違和感を覚えるも、空腹の鐘が後押しとなり、少しだけ恥ずかしそうにしながら執務室を後にする。

「――――対象（ターゲット）、ナツミ御姉様。誘導に成功いたしました」
『出かしたでぇ、ヨシュア』
『ミミも連絡するよ！ユリウスが動いた！』
『ふふふっ順調順調♪　今からナツミ嬢ちゃんのはねむーんがいつになるか…想像するだけで顔のニヤけが止まらんわ』
ナツミ・シュバルツ嬢が預かり知らぬ中、黒い陰謀ならぬピンク色の陰謀が蠢こうとしていた。

「おっ」
「あ」
ナツミ・シュバルツはお気に入りのレストランの前でユリウス・ユークリウスと出

会った。
「もしかしてお前も今から、飯か？」
「あぁ、こんな偶然があるのだね」
この二人、実は会うのは二ヶ月ぶりである。
ナツミ嬢は久しぶりに会う親友を前に気分を高揚させ、ユリウスは想い人（無自覚）との久しぶりの再会に心舞い上がる何かを感じていた。
「久しぶりの再会だ。僕の奢りで少し話さないか」
「おおっ気前良いじゃん！」
肩をバシッと後ろから叩かれ、満更でもない顔をして「レディとしてこのようなスキンシップはどうかと思うよ」と言うユリウス。
「異性として意識したことないから別に良いんだよ」と信頼を込めて返したナツミ嬢。
見えない杭が刺さったかのように一瞬心臓を掴む仕草をするユリウス――
この光景をとある場所から監視していたアナスタシアは、双眼鏡を横においてニンマリと目元柔らかな吐息を漏らした。
「――イける」
ナツミ嬢に対してユリウスが敬語を使っていないという点。
久しぶりに会う状況特有の微妙な距離感。

然り気無いエスコートをするユリウス。
今までこの二人の関係をじっくり観察してきたアナスタシアは、かつてない程の高条件に今日彼らの関係が大きく動く予感をビビっと感じ取っていた。

「何を頼み、ましょうか?」
「そうだな…」
一応上級階級御用達のレストランである為、外面上は令嬢として振る舞うナツミ嬢。
ユリウスはメニュー表を広げ一点を指差す。
「この、サラダなんて」「申し訳ございませんお客様!そちらはブレックファーストメニューでして、此方がランチ用でございます」
ユリウスの横から現れた眼鏡を掛ける小柄な獣人の少年がメニューを回収し、先程までアッサリしていた物ばかりだったそれがボリューム感のある肉料理を中心としたメニューに替わった。
「あらっ丁度肉料理を食べたいと思ってましてよ。運が良いですわねユリウス……様。」
「う、うむ?」

何処かで見たような獣人の少年を視線で追うユリウスは違和感を覚えつつナツミ嬢の言葉に頷く。
「じゃあ私はこのニンニｋ…」
「申し訳ございません！お、客、様！此方もブレックファストメニューでした！此方が本当のランチメニューでございます」
『ニンニクたっぷりキムチ鍋』を選ぼうとするナツミ嬢にまたもや現れた獣人の少年。
「どうやら、忙しい時間帯に訪れてしまったようだね」
「そのようですわね。落ち着くまでお互いの近況報告でもしていましょうか」

ナツミ嬢とユリウス

「やった！二期が始まったぜ！」二期一話視聴後「嘘だ……嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だアアアア!!!」

僕の仕事は場を整える事です。

「あの二人……天然なのかわざとなのか、ほっとくと直ぐにムードをぶち壊しやがるのですよ」

店を貸し切るのも店員に成り済ますのも僕の手に掛かればお茶の子さいさいなのです。ですから、エスコートする側の意見も聞かず、朝食ならまだしも午後の事を考え、そこそこ精力のつく物を食べたい時間帯にサラダ料理を進めようとする（自称）女性の扱いを心得ている同僚を影からサポートをしたり、口をニンニク臭くされてはムードもへったくれもないとメニューを慌てて取り替える機転さだって求められるのです。

――それにしても

片方は仕方ないですがもう片方は……『貴方（ユリウス）は気があるのだからもう少し考えて行動なさい』と言わざるを得ないのです。

ナツミ・シュバルツお嬢様。
少々目付きがおキツイ方ですが、このような事態になる前も社交界ではそれなりに有名なお方でしたし、男の影こそ欠片も覗かせない人でありましたが、人を選ばない持ち前の明るさあって評判も上々……まさに選り取りみどりというやつです。
今でこそ餓えた狼のように彼女に求婚を申し込む非常識者は珍しくなってきましたが、彼女の権力もあって逆に腹黒い野望を胸に、取り入ろうとする輩が増えてきたのは頭の痛い話ですよ。
「やれやれです」
言っては何だが、この二人がそういう関係になるのはとても難しい事だろう。
ナツミさんからは何が何でも貞操を守り抜くという鋼の意思を感じますし、口では娶るだの、迎え入れる、など言うもののナツミさんとの友人関係に居心地良さを感じて、いつまでもぬるま湯に浸かっているような男だ。
モノクルを掛けた獣人の少年ティビーは首を竦めて息を吐いた。

「ナツミ」

「何ですかユリウス様」
「最近はどうだい、派遣した人材だけで手は足りているのかな？」
ユリウスが問い掛けるように会話を切り出すのは何時もの事だった。
そうしないと彼女は本当に何も喋らない。
だがそれは無口とか口ベタなどの理由があるからではなく自分に対して遠慮していないから。気を使う必要がないからだ。
ナツミはよく喋るが、喋るのが好きではないのだろう。
本人から直接言われた訳ではないが、伊達に幼馴染をやっている訳ではない。
（こうして自分が信頼されているという実感に浸るのものいいが、久しぶりの食事で何も話さないというのは面白くない）
「……現状では何の問題もありません。ヨシュアやガーネットは慣れない多重過多な仕事でありながら要領よくこなせていますし、懸念していた賢人会からも現状では表だった嫌がらせは受けていません」
「我が弟も君の下では学ぶ事も多かろう、まったく君の博識には頭が下がるよ」
「ヨシュア……くんは優秀ですよ。ですが前から言ってますけど、私は〝していい〟事が他の方々より多いだけであって、その道のプロに比べれば勝てる要素なんて米粒のようなんですからね？」

～の資格や免許が必要。～をするには～期間学ぶ必要がある。
組織化された仕事ほどそういった学歴は求められる。
幼い頃の彼女はまるで見えない何かに駆り立てられていたかように勉学に取り組んでいた。
今でこそ落ち着いたが彼女は私でも把握しきれない量の学問を一通り修めている。それを誉めれば『浅く広く』などと謙遜するが、王族が任されていた仕事の大半を任せられる学歴という物がどれだけ凄い事か……言葉に現さなくても分かるだろう。
「たまに疑問に思う事がある」
「あら、何ですの？」
運ばれてきた白身魚のムニエルにナイフを通すナツミ嬢。
「――かつて君は学者肌なのかと尋ねた事があった。」
「……あ、ぁぁそんな事もありましたね（覚えてない）」
「その時、君は鼻で笑ってそれを否定した。現に裁判官という学者とは程遠い職についた」
「勉学は必要だと思って修めただけですからね。深い意味があった訳ではございません」
「裁判官には魚の捌き方まで求められるのかい？」

「何も子供の頃から裁判官を目指していたわけではありませんわ、私はただ人々の役に立てるような立派な――」

「人の為になる……か、憧れている人でもいるのかな？」

それはユリウスが何気なしに呟いた事だった。前々から何を理由にしてそこまで頑張れたのか、気になっては尋ねていたのだが確証を得られた物はなく、恐らく今回も空振りだろうと思っての発言だ。

やっぱりあの人の子だな

「なん……て」

「ナツミ？」

彼女の雰囲気が変わった。

「――いえ、何でもございませんわ」

「そ、そうか」

と、思えばいつもどおりの笑みを作り食事を口に運ぶ。

一瞬とはいえ虎が兎になったような豹変に面食らうユリウスである。

井の中の蛙、大海を知らず

（……ナツミ・シュバルツさんは何処にいるんだろう）

王選開幕を告げる式典の中、銀髪のハーフエルフ――エミリアは視線を彷徨わせる。

「私が王になった暁には――――」

人々のざわめき、クルシュの王としての野望。それに各々が反発や感嘆の息を表す……私たちと対面するように席を置く賢人会の周囲には居ない。懇意にしているという精霊騎士や治癒術士の近くにもそれらしい姿は確認出来ない。

ナツミ・シュバルツは好んで黒いドレスをよく纏う。だから人目につきやすく、すぐに目に止まる筈だとロズワールから聞いていたエミリアだが、顔は知らなかった。

元貧民街の開発区画ではナツミ・シュバルツの威光を肖って等身大の石像を作ろうという話が上がっているらしいが、元々文官仕事からエスカレーター式に偉くなっていた彼女が大衆の面前に立ったことなど数えるほどにもなく、せいぜいが彼女の家が主催するパーティーへ主席したぐらいである。その時は単なる軽犯罪専門の裁判官であった為、注目もなかった。

「……リア、逸る気持ちも分かるけど次は君の番だよ」
耳元でそっと囁くパックの言葉にはっとして彼女は前に出た。
「私の望みは一つ、ただ公平であること。全ての民が公平である国を作ることです」
「は、魔女擬きが何を言うかと思えば影の女王の真似事か」
自分がしたいこと。心から望んだ願い。それを公言すれば、同じルグニカ王国の王位継承の資格を持った候補者であり、燃え上がる炎のようなドレスを纏った女性――プリシラ・バーリエルが口を挟む。
「そんな事ッ」
「奇しくもルグニカは影の女王の采配によって目覚ましい発展を遂げている。まさに妾が支配するに相応しい……理想郷といった所か。今さら影の女王の席を廃絶し、他者が手を加えた所でそれは名画に泥を塗るようなもの、はっきり言ってこれ以上の発展は望めまい」
「そんなの、やってみなきゃ分からないじゃない」
「分かるとも、現にここにいる全ての候補者があれを越える目標として捉えるのではなく、如何に上手く使うかを思量しておる」
クルシュやアナスタシタらを一瞥し、嘲笑う表情を隠すように取り出した扇子を口に当てる彼女。

「今回の召集に応じたのは、妾を差し置いて王を名乗る某に軽い灸を据えてやるつもりであったが、賢人会の権威はもはやあれを縛る効力はないと見た」
賢人会の一部は不快そうに顔を歪める。
それで分かった。エミリアがナツミ嬢を見つけることが出来ないのも無理はないのだ。何せ彼女はこの空間に存在しないのだから。
「居ない……？」
側に仕えるロズワールを見れば、彼は苦笑して首を縦に振る。
「さて、つまらぬ事に時間を浪費してしまった。ウェイターの愚物、次は貴様の番であろう」
「ウェイター、ウェイターってあぁもう！」
癇癪を起こす金髪の少女――フェルト。
浮浪者と蔑まれる立場からいつしか開発区画にある飯処の看板娘と呼ばれるようになった彼女はここにいない女性に向けて叫ぶ。
「あたしが、王になったら？
全部姉ちゃんに仕事押し付けてやっから、今と何も変わんねーよチクショウ！」
投げやりのようで、彼の騎士たるラインハルトを連れて舞台に上がり、（言葉使いに粗が目立つものの）形式上問題ない作法を取ったのは、誰かの入れ知恵あってのものか。

「……私だけ、ナツミ・シュバルツさんの事を何もしらない」

五人の候補者が選ばれ王選の開幕を告げる式典。エミリアはそこで他の候補者達との間に価値観や見えているものが違うような……寂寥の思いを抱いた。

番外編　剣聖のご加護

ナツミ・シュバルツ。
ルグニカの影の女王――十七歳。
博識であり努力家。しかし、その努力が誉められることをあまり良しとせず、徹底して隠そうとする。
よく笑い、よく怒り、よくふて腐れては、どうしようもないことで大袈裟に驚いてみたりと感情の起伏の激しい喜怒哀楽に溢れた友人だ。
僕、ラインハルトはそう認識している。
そして、もう一つ。
ナツミ・シュバルツはナツキ・スバルという前世の記憶がある。
これは、彼女本人によって打ち明けられたものではなく『視界にある全ての生者の魂の色を判別する加護』や『相手が女装や男装をしようと決して性別を見誤らない』という僕が複数持つ加護によって偶然分かってしまった事実で、彼女が何よりも知られて欲しくなかったパンドラの箱であった。

「影の女王と最優の騎士か……」

真新しい冊子を手にして、彼は小さく息を漏らす。

この本はアナスタシア・ホーシン監修の元、ホーシン商会にて大々的に売り出され近年稀に見るヒット作として彼女の祖国たるカララギ都市国家は勿論のこと、このルグニカや神聖ヴォラキア帝国までも普及する――近々劇場化の話も進められている作品だ。

あまりこの手のジャンルには疎遠となるラインハルトも友人の騎士の薦めで読む事になり――高飛車でどこか抜けているお嬢様と、淡い恋心と友愛の区別もつかぬ幼なじみの騎士がそれぞれの道を歩みながら、時に交差し、ぶつかり合って支え合い、やがて互いを異性として意識し出す物語には素直に面白いと感じた。

現在出版されているのが序章であり、次回作が出れば自ら買いに行こうと思うぐらいにはこの本に魅了されてしまったと思われる。

これが、ナツミ・シュバルツとユリウス・ユークリウス。二人の友人が元となっている事を知るまでは。

※※※※※※※※※

――シュバルツ領に魔獣の群れが住み着いた。

「ご協力感謝いたします」
当時、十五歳にしてシュバルツ家当主に在られるナツミ様の嘆願を受けて我ら騎士団はその討伐へと赴き、本来なら僕のような位のものが任される仕事ではないが、私は友人であるユリウスに同行してその任務に当たっていた。

剣を真上から下へと振り下ろす。
猫科の中型魔獣。その首を切り落として付着した血を彼、ラインハルトは払った。
「お見事」
「お褒めに与り光栄です」
隊列を組む騎士団の中で紅一点。
微笑みを浮かべ、騎士を褒め称える仮初めの主にラインハルトは儀礼の感謝を告げる。
「……何故、君がいる？」
危険な魔獣の跋扈する森の中ではあまりに似つかわしくない黒曜のドレスを纏った少女――ナツミ・シュバルツ。
青年の記憶が確かなら、彼女は自らの屋敷を背に我らを見送り出して安全な場所で任務完了の報告を待っている筈だった。

眉を八の字に歪めたユリウスは声に出して彼女の肩を掴む。
「お役所仕事に嫌気が差して……いえ、折角の機会ですもの。彼の剣聖の腕前をこの目に収めようと、こっそり着いて来たのですわ。一応、剣聖様から許可は戴いています」
「――なッ」
絶句して僕を見るユリウスに困ったような笑みを返す。
我ながら恵まれていることは自覚している。どれほど強力な魔獣が現れようと淑女一人守り通せる自信があった。
勿論、慢心が理由というわけではない。
彼女自身、魔法使いとして高いポテンシャルを誇り、森の管理者としてかなり詳しく地理を理解している事から此度の任務に有用であると判断し、僕が守り、我々の陣形から離れない事を条件に騎士団から許しを得たのだ。
「仮初めとはいえ、ナツミ様は僕の主となられた。大丈夫、君の友人はこの僕が責任をもって守護しよう」
「――いや、騎士団の総意なら今さら彼女に引き返せなどとは言うまい、しかし彼女の守護は私が請け負う」
ラインハルトの背に隠れるナツミ嬢を見つめ、ユリウスは数秒思案して彼女を強引に抱き寄せた。

「なっユリウスぅ!?」

戸惑うナツミ様。

ここにフェリスやアナスタシタ様がいれば、普段からそのぐらい積極的にいけや！と鋭いツッコミを放つのであろうが、察しの悪い事に、その時の僕には彼がナツミ様に対して特別な想いを抱いていたことに気付くことが出来なかった。

ただのエミリア

――ねぇ、リアはどうして王様になりたいと思ったの？

エミリアはプリシラ・バーリエルに何も言い返すことが出来なかった。

『私の望みは一つ、ただ公平であること。全ての民が公平である国を作ることです』

あの時、騎士達は眉をひそめ貴族達は面白くなさそうな顔をしていた。

その件についてはナツミ・シュバルツが数年前から動き出していたから。それによってルグニカ全てから差別の意識が消えた訳ではないが、王として目を向けるほど大きな問題ではなくなったから。

（思えば、王都にきてからこの髪や耳に関心を向けられることは少なかった）

勿論志としては立派だ。

だが、人が人である限り異分子を排除しようもいう感情は切っても切り離せない。

銀髪のハーフエルフという忌み嫌われるエミリアが白昼堂々と街中を歩けるのだ。

これ以上何を望むのだと誰かが言った。

ナツミ・シュバルツは稀大の革命児。神算鬼謀の逸脱者であり、無血革命の祖とすら

称えられるほどルグニカに残した伝説は数知れず、打ち出した類型を破る政策の全てを成功させてきた怪物だ。

『私から一つアドバイスすることがあるとすれば、間違ってもあの娘相手に知恵比べなど挑もうとしないことなのよ』

王選に向かう前に珍しく禁書庫から出たベアトリスの忠言だ。

あの場で仮に誰か一人でも「そう宣うならナツミ・シュバルツよりも素晴らしい政策を出してみろ」そのような声を上げればエミリアの立場はより悪くなっていただろう。

何も知らぬ小娘がただ公然の場において無知を晒し、現時点での国の主ともいえる女王の国政に口を出した。あの場でエミリアにつけられた評価はそれである。ナツミ・シュバルツを目の敵にしている賢人会ですら、エミリアの堂々たる失言には嫌悪の色を隠そうとしなかった。

――言っては悪いが、エミリアにはプリシラような王としての才覚はない。

クルシュのように信頼できる配下に恵まれていたり、アナスタシアのように商才に溢れている訳でもフェルトのような最強の騎士を従えている訳でもない。

ナツミ・シュバルツのように異界の知識を持っていなければ、総じて彼女達に比べエミリアは何もかもが劣る。

村の人達を助ける為に龍の血を欲しかった。
ルグニカは龍と盟約によって結ばれ、ルグニカの王は万物万象の災いを払いのけると云われる龍の血を扱うことが許される。
エミリアは氷の彫刻と化した生まれ故郷の人達を救いたい一心で王選出場を決意した。あの場で溢した発言に何一つとして偽りはないとはいえエミリアのそれは単なる言い訳。心の何処かでは村人達を救うことが出来れば王様なんてどうだっていい…そんな思いがあったかもしれない。
エミリアは思いばかりが先走りルグニカ王国の未来について真剣に考えたことがなかった。
だからだろうか。
「元気だしなよ、リア」
「…うぅん。落ち込んでるわけじゃないの」
手の内にある二本の串肉。
『お嬢ちゃん、可愛いから一本サービスな！』
生まれて初めてオマケなんて貰った。
「……わたしなんかが、王様になってもいいのかな」
エミリアは改めて王都の街並みを見て周り、自らが王となった場合の存在意義を見い

だせなくなっていた。
　これでフェルトのように王になったらナツミ嬢に全てを任せるなんて楽観的になれれば救いもあるが、彼女は赤の他人に責任を押し付けて自分だけが楽をしようなんて結論には至れない。
　…優しいのだ、致命的なまでに。
　そしてこのルグニカはエミリアの優しさを蝕んでいく。

「私ね、無意識にあの村とこの国全体を同じように見ていたんだと思う」
　エミリアは少し前まで森の中で暮らしていた。食糧や日常品は寒村から物々交換によって手に入れていたが、その村の人達は私が銀髪のハーフエルフであることを恐れて気味悪がった。
「あの頃は普通に話したい、友達が欲しいってずっと思ってた」
　自分が銀髪でなければ、ハーフエルフでなければどれだけ良かったかなど、何度理不尽を嘆いて枕を濡らしたか分からない。
「銀髪のハーフエルフじゃなくて私を私としてみて欲しい。私と同じような理由で苦しんでいる人がいるなら救いになりたかった」
　でも、救いのヒーローはもう居たのだ。この街では誰もエミリアを銀髪のハーフエル

フとして蔑まないし、何もしない彼女に注目もしない。貧民街と呼ばれていた所にいってみたが、昼間は仕事に明け暮れ日が傾けば男たちは酒樽を囲い、女たちは会話に花を咲かせていた。

「分からないよパック。私は、どうしたらいいの？」

「……」

膝を抱えるエミリアにパックは困った顔をする。

気分転換にでもなればと王都の探索を提案したのは自分であるが、エミリアは国を良くしようというのに、悪い所を探して正せばいいと考えていた。

今日1日で多く、あまりに多くの人とエミリアは出会った。その殆どが見ず知らずの自分に好意的で気さくに対応してくれた。ただのエミリアとして見てくれることは嬉しかったに違いない。そんな彼らにきっと不幸を抱えている筈だと疑いの目を向けていたのだ。きっとその罪悪感もあるのだろう。

だが、本当に彼女を苦しめているのは自分が王様になったら彼らを悪い方向へと導いてしまわないかと無意識に背負ったプレッシャー。それが村の人々を救いたい想いと板挟みになって喘いでいる。

パックは自分がどう答えても励ましにならないと思った。

「リア、僕が答えてもきっと今の君を納得させることは出来ないと思うんだ」

ロズワールの話では会談は明後日になる筈だ。それはあくまでロズワール個人での会談となるが――――

「二日後の会談で、ナツミ・シュバルツ。実際に彼女に会って話してみるといい」

大精霊は含みある笑みを浮かべて契約者を諭した。

魔女の怒り

ナツミ・シュバルツは嫉妬の魔女に魅いられている。

この世に二つしかない書物に記されたそれの記述は森羅万象において嘘偽りなく、恐らくは平行する世界においても一定の効力を持つであろう白を黒に塗り潰す絶対の事実である。

当初、この恩恵を受けたロズワールは絶大な権力を持つナツミ・シュバルツをエミリア陣営へと引き入れるべく、柵（しがらみ）の多い表舞台から消えていただこうと遠国から腸狩りを招いたり式典にて嘘を見破る加護を持つクルシュ・カルステンの前で彼女が魔女教徒であることを告発する計画を立てていた。

「腸狩りを無傷で迎撃するなーぁんて、また有名所を引っ張ってきたものだ」

権能の一つでも使ってくれれば魔女教の嫌疑が強まるとして襲撃を掛けさせた腸狩りに対峙する一人の戦士。

セシルス・セグムント。

帝国最強の戦士にして世界に十振りとない名剣の使い手。彼によって腸狩りは完封され撤退を余儀なくされた。

王族の一斉死去のゴタゴタからヴォラキア帝国とは殆ど絶縁状態だったルグニカに、帝王が彼の戦士を警備として貸し与えているとは流石にロズワールも予想外であった。
「――彼女の口の固さを買って依頼したが、式典に参加しなかったのを見るに、やはり勘づかれたか」
腸狩りは暫くは使い物になりそうにない。
ペラペラと黒い冊子のページを捲り、落胆するように息を溢す。
「ベアトリスの忠言を無視した結果かな」
まだ私がやったとは気づかれていないのだろう。でなければ此度の会談は成立するわけがない。セシルス・セグムントの力を過信しているのなら式典から退いた意図が分からないし、状況から見るに彼女はとても用心深い性格をしているようだ。
「どうやら私は君の事を過少評価していたようだよ」
王都にある別荘に窓枠からシュバルツ家の屋敷の方角を眺めるロズワール。彼は一瞬上を見て鋭い目付きへと変える。
「これは本腰をいれて、争う必要があるのかな?」
久しぶりに全身の血が熱く沸き立つ感覚を覚えていた。

「――あぁ、嗚呼。滑稽デスねぇ

実に怠惰な行いです」

「はぁ～僕は静かに慎ましく暮らしたいだけなんだよ。

何でかな…火に手を伸ばしたら火傷する事ぐらい子供にだって分かるよね。いい歳した大人なんだからして良い事と悪いことの区別ぐらい付けようよ？

僕も〝傲慢〟も何一つとしてこの国の不利益にはなっていないというのに、傀儡にしようなんてあんまりじゃないか。これだから健全な庶民から血税を巻き上げて私腹を肥やす貴族ってやつは信用できないね」

屋敷上空。

不可視の手のひらを足場として、窓枠から顔を覗かせたロズワールを冷たく見下ろす二人の男。

魔女教大罪司教『怠惰』担当ペテルギウス・ロマネコンティ

魔女教大罪司教『強欲』担当レグルス・コルニアス

福音によって導かれた彼らはロズワール・L・メイザースの暗殺の為に降り立った。

美味しいお酒も量による

銀光の差し込む陰湿とした路上の裏。

「……くぅ、……ふぅ……」

黒髪の少女は脂汗を滲ませて体をくの字に折る。

ギュルギュルと肉体の内から締め上げるような音がした。

彼女は猛烈な吐き気に襲われたのか口元を覆い、食道から逆流しようとするそれを必死に抑えようと努めたものの……「だから、言ったんですよ。自業自得ですって」

いつの間にか背後に佇んでいた男の言葉を最後に口から溢れ出る茶色の吐瀉物を辺り一面に撒き散らした。

「――オロロロロ」

とても人様には見せられない姿だ。

そして黒いドレスにすらその飛沫を散らす百年の恋も冷めるような彼女の名はナツミ・シュバルツ。

王国の影の宰相や女王だとか本人の限界スペックを越えた過大評価を受けているが、その実態は腱鞘炎を回復魔法で誤魔化しながら終わりのない職務時間と迫る納期に駆

り立てられる休みなきブラック社員である。

「僕、美少女はゲロ吐かないんだと思っていたんですど貴方のお陰で幻想がぶち壊れました！」

半端に消化されたパスタやお酒と酸っぱい臭いが辺りに立ち込める。

護衛であるセシルスは彼女の背中をさすっていた。

ナツミ・シュバルツ嬢は酒に弱い。だが全く飲めない訳ではない。それを自覚して普段は飲むペースを考えているのだが、ロム爺やフェルトなど久しぶりとなる知人達の前でつい羽目を外してしまい肝臓の処理能力がキャパを越えてしまったらしい。

「うげぇぇ……それ、は悪かったですね」

口元を拭う。最後の王選候補たるフェルトが王選出場への表明を表し、龍の盟約に従い正式に王選の開始を告げる式典への参加を求められた彼女であるが、ゲロをぶちまけた今の状態では不味い。

時計はないが湯浴みや新しいドレスを揃えたとして、これから式典に向かおうにも間に合わないであろうことは彼女にも察しがついた。男の頃なら口を濯いで特攻かませるほど図々しくもあれたものだが、ナツミ・シュバルツとしての半生が自己を突き通せるほど鈍感ではいられないことを教えてくれた。

成長したのだろう。生前に比べれば世渡りが上手くなったと言える。

「セシルス……あんな奴らの顔色を伺うのは癪だが今回は全面的に私が悪い。賢人会に謝罪の文を今から書くから大至急、神殿まで届けてくれ」

そう言うと彼女は懐から紙とペンを取り出して、覚束ないペン裁きで毒にも薬にもならない長ったらしい文章を書き上げるとセシルスに託し、床につく。

「えっ、ちょ！……護衛対象を一人に出来るわけな」

セシルスは何か言いたげであったが、数日分の疲れが酔いにどっと被さって思考が回らない。

横にあった木箱に頭をおいたナツミ嬢はうっすらとした視界の中で何かしら銀色の物体が蠢いているのを納めながらゆったりと意識を暗転させた。

番外編　孤独なキング

「私にとって姉ちゃんがどんな人だぁ～？」

元貧困街・開発区画にある人気の飯処。

客のピークが過ぎたその頃、看板娘であるフェルトはナツミ・シュバルツの知人を名乗る赤毛の男から質問を受けていた。

「何でたってそんな話を聞きたがるんだが、騎士様の考えは私には理解出来ねぇが……」

その微笑み一つに金を払う女だっているだろう憎たらしいぐらいの美少年。

地位や名誉に縁のないフェルトでさえ、彼が一介の騎士という身分に収まらないことは暗に理解出来た。

ラインハルト・ヴァン・アストレア

世に言う天才であり、精霊の寵愛を受けた、神のごとき人。

何れはこんな傑物が自分を御輿の上に担ぎ上げて、一の騎士を名乗るなんて想像もしていなかっただろう。

フェルトはチラリと皿を洗うロム爺を見て、あれが終わるまで賄いにはありつけない。なら暇潰しには丁度いいかもしれないと椅子を引いた。

「最近はあんまり会ってないけど、取り敢えず昔の話でもすればいいのか？」
「――ええ。お願いします」

ラインハルトの返事を受けてフェルトは瞑想する。
ナツミ・シュバルツと初めて会った日のことを。

盗品屋――それはまだフェルトとロム爺が裏稼業にて食い扶持を得ていた頃の話。
今日も今日とて富裕層の誰某から適当に金品を頂戴してロム爺に換金して貰おうかと考えていた早朝であった。
その女は突然やってきた。
「私の名はナツミ・シュバルツ！
博覧強記にして天下不滅の億万長者ッゥ――――ふがくっ!??」
「……あ？」
盗品屋の扉を勢いよく叩いて、打ち反った扉に弾き飛ばされる貴族風の女。
「依頼人か……？」

「億万長者とか言っとったし、そうなんじゃないかのぅ?」
あまりの珍事件にフェルトとロム爺は互いの顔を見合せる。
報酬にケチをつけてロム爺に尻を叩かれる依頼人はいたが自分で開いた扉に閉め出される依頼人など初めてである。
それでも一応、客かもしれないのでどっちかが見に行くかと面倒事を押し付けあっていると、
「あの……ハンカチ貰えません?」
鼻血を垂らした女が申し訳なさそうに扉を開いた。
お高そうな白いドレスは散々な有り様で、路上で転げ回ったのか髪は土と枯れ葉交じりでボサボサだった。
「はぁ〜〜仕方なねぇな。これで拭けよ」
フェルトはそこでテーブルにあった雑巾を投げ渡す。
「…ありがとうございます」
女は躊躇いなくその雑巾で顔を拭った。
…どうやら目の前の女は馬鹿らしい。
フェルトがその事を理解するのに時間は掛からなかった。

「――少し、よろしいでしょうか？」
「何だよ、まだ始まってもいないじゃねぇか」
「いえ……」
　フェルトが目を見開くとそこには困惑したような赤毛の少年の姿があった。
「ナツミ様は従者の一人もつけなかった……いえ、ナツミ様はお一人で来られたのですか？」
「うぉん？
　そうだな、姉ちゃんは一人だったぜ」
「（ナツミ様は仮にも伯爵令嬢だぞ……、騎士団は何をしていたのだ？）」
「――あー、続けていいか？」
「話の腰を折ってしまって申し訳ありません。お願いしてよろしいでしょうか」

「貧困街で事業を立ち上げたい？」
「その通り！私は軽犯罪専門の裁判官をやっているのですが、貧困街での犯罪発生率の

まぁ高いこと！

このままだと私が過労死しかねないので、いっそのこと大規模な事業を起こして、非労働者の暴れる時間を金を稼ぐ時間に当てさせ、得た金銭で暴力以外に娯楽を見出ださせれば、犯罪率も少しは下がるのではないかと思いましてこのナツミ・シュバルツが一肌脱いでやろうかという話よ！……あ、です！」

鼻血が止まらないらしいナツミという女――ナツミ姉ちゃんは、お世辞にも清潔とはいえない雑巾を鼻の穴に突きつけて、テンション高く話したてる。

その光景があまりに面白いので暫くみていることにした。

話の内容をみるにここら一体のクソ野郎どもから盗品屋の店主として顔の立つロム爺に関連する話のようだが、姉ちゃんは乗りの軽いヤツみたいで部外者の私がいることにとやかく言うつもりはないらしい。

「まぁお前さんが言いたいことは分かったが、こんな偏屈な場所で金になりそうなことなどあるまい」

ロム爺はクソ野郎どもの心配よりも、金もなければ畑もないここらでどのような仕事を作るのか単純に疑問に思ったようだ。

「それは、街道作りとか橋を作ったりとか公共事業として国に金を払わせるんですよ」

「勝手にやったって国は払わんぞ。お前さんは裁判官のようだが、上にパイプはあるの

か？」
「騎士団には昔馴染みがいます。
　協力を得られる確証はありませんが、とある一件で剣聖様と個人的な付き合いも得られました。すぐには無理でも、公的事業というのはいくらお金があっても手が回らないもの。
　何れは国も認めて予算を当ててくれる筈です。それまでは私の貯金を崩していけば、なんとかやっていけるかと」
「……ふむ。嬢ちゃんや、何人ぐらい必要かの？」
「十……いえ、二十人も集まればよいかと」
　ロム爺は何故かいつになくやる気だった。
　話半分に聞いていたフェルトは至って真面目に話し合う二人へと横を指す。
「二十人って、少な過ぎねぇか？」
　ここら辺だけでもクソ野郎の数は百は下らない。
　ナツミ姉ちゃんが言うように犯罪率とやらを下げるには、全てとはいかなくとも過半数以上のクソ野郎を働かせなければ意味がないのではないだろうか。
「フェルトや。そうは言っても此方側の人間は基本我が身可愛いさに臆病な者ばかりよ。初めはどうしたって大した数は集まらん」

「二十人でも多いほうってか……はっ、下らねぇ」

折角のチャンスを臆病風吹かれて棒に振るなどフェルトからしてみればありえない話だった。

仮にフェルトがクソ野郎共の立場だったら何が何でもそのチャンスを掴み取り、権力者であるナツミ姉ちゃんに取り入って、金を稼いで、稼ぎまくって、こんな生活とはおさらばしてやる……少なくとも、それほどの意気込みを持って飛び付いた筈だ。

「……負け犬め」

故に侮蔑の意味を込めてフェルトは大っ嫌いなクソ野郎共を軽蔑する言葉を吐き出した。

「――――ていっ」

その額に指先が走る。

番外編　楽しいキング

鋭い痛みがフェルトの脳内を駆け巡る。
呆れたように此方を見るナツミの放った風来の一撃はフェルトの額を軽く弾いて桃色に染め上げた。
「ッウ――――何すんだよ！」
突然そんなことをされれば怒られるのも無理はない。
「いや、お前があんまりにもあれな顔をしてたんでっい」
「あれな顔ってなんだよ！」

「……アヘ顔？」
「私はそんな変態じゃねぇ!!!」
「ま、そうカッカすんなって」
姉ちゃんはさっきまでの小綺麗な態度とはうって変わって、ゲラゲラ笑うそこらのヤンチャ坊主のような砕けたものになっていた。
「あれだな。お前ごときが世界を推し量ろうとは百年早い！

いや、世界に絶望するのはまだ早い……か？
とにもかくにも、そんなつまらなそうな顔すんなって」
今に思えば、姉ちゃんは私に気を使って無理な言葉使いをしていたのだろう。
突然の豹変にロム爺も面食らっている様子であったが、「すまん。こっちが素なんだわ私」と言う姉ちゃんの言葉に苦笑して話を続けさせた。
「そうだな、フェルト！
良いものを見せてやる。と言うわけでお前も私の事業に付き合え」
「……は、何で私が」
「まぁ騙されたと思って着いてきなさいよ。ちゃんと給金は出すし、なんと今ならマヨネーズも付けちゃう！」

「成る程。貧困街の開拓はその時から始まったのですね」
――――ま、そう自信満々に言ったんだけど、集まった奴らが備品を盗むわ、飯を奪いあって喧嘩し始めて散々な結果だったんだよ。
でも、マヨネーズは旨かったぜ。

今でも失くなったら姉ちゃんに作って貰いにいくんだ。

「……ナツミ様も初めから完璧ではなかったと」

ラインハルトは意外そうに目を見開く。

あの頃の姉ちゃんは今と同じで行動力の化け物みたいな感じだったけど、経験が足りなかったんだろうな。

地頭も良いし色々知ってるけど、肝心な所で抜けているんだわ。

「経験、ですか」

それに昔の姉ちゃんは、あんまり人を頼ろうとしない人だった。

いつも笑ってるけど、いつも誰かの為に苦労してその苦労が空回りしたら、一番自分が頑張っただろうに泣き言も言い訳も吐かずに迷惑をかけたヤツらに頭を下げに行く。

『何だって損な役回りばっか引き受けるんだよ。姉ちゃんは働きたくねぇから、クソ野郎共に仕事をあてがったんだろ？

上手くいかなかったなら諦めちまえばいいじゃねえか。確かに姉ちゃんの仕事の量は変わらないかもしれないけど、こっちと本業の二足のわらじを踏むことはないんだから』

自分は隣に立って何もしてこなかったけど、姉ちゃんの頑張りは誰よりも見てきた自負があった。

そしてこれ以上やっても芽は出ないだろうから、諦めろと言ってやったんだ。
そしたら姉ちゃんは、悔しそうな顔をして言ったんだ。
『まだやれる』
……と。
『うぜぇぇぇ!!!』
なんかウザかったから思いっきり尻を蹴り飛ばして川に落としてやった。
「……え?」
ずっと隣にいた私に一言も頼ろうとせずに格好つけようとする様を四六時中見せつけられてどれだけイライラしたことか。
一人で無理なら私を頼れ。私で無理ならそのラインハルトなんちゃらを頼れ、別に私はどれだけ姉ちゃんが情けなくても他人頼りの無能でも友達(ダチ)を止めないから！
腹の底から心からの気持ちを叫ぶ。
『……ぷ、ハハ。マジかよ、ハハハハハハハ!!!』
私の叫びを聞いた姉ちゃんは、腹を抱えて笑った。
それはもう笑い死ぬんじゃないかと思うぐらい。
『ありがとうフェルト。お陰で目が覚めたわ』
そして笑い終わって憑き物が落ちたような顔をした姉ちゃんは、次の日オットーとか

言う商人を引き連れてきた。
なんかナヨナヨした情けないヤツだと思ったけど、これが意外と出来るやつで、姉ちゃんの完璧に思える案に商人ならではの視点からズバズバ指摘してくる。
姉ちゃんの頭脳とオットーの経験が合わさると、まるで足りなかったパズルのピースが揃ったみたいに今まで滞っていた問題が次々と解決していった。
そのまま順調に進んで貧民街が開発区画と呼ばれるようになったころには、街並みは一変してゴミが見当たらず路道に花畑なんか作られるようなった。
姉ちゃんは自業自得なのだが、貧民街の開発で膨らんだ仕事のせいで現場に出てくる暇もなくなって、オットーがそのあとを引き継いだ。二人が小まめに文通しているのは知っていたが、私もその頃になると盗品屋が飯所に変わってロム爺に頼まれて仕方なしに始めたウェイター仕事で忙しくなった。
稼ぎは盗みの時よりもずっと少なかったけど、それは楽しい日常だった。クソ野郎だった奴らはやれ子供が可愛くて困るだの、嫁さんの尻に敷かれて辛いと楽しそうに飯を囲んで、あぁ…姉ちゃんが見せたかったものはこれなのだと私は満足していていたんだ。
『フェルト。お前が王様になるべきだと私は思う』
でも、お前が私を王選の候補者として見出だして姉ちゃんが私を推薦したせいでその

日常にも罅が入った。

「……はは」

なに笑ってんだこの野郎。

『お前がお…私を蹴り飛ばしてくれなかったら、今でも私は回りの見えてない道化だった。お前に知恵が足りないと言うのなら私が貸すし、私の友達が貸してくれる。

フェルト、私はお前が王になった国で尽くしたいんだ』

知ってるからな？

お前が姉ちゃんを囃し立てたなんて。

姉ちゃんは実質の女王とか言われてたから、仮に私が断っていたらどれだけ大変なことになっていたことか。

「だが、貴方は断らなかった」

当たり前だ。

私は姉ちゃんが作ったこの国が好きだ。

私以外のやつが王になって、この国のあり方を変えてしまうようなら、私が王様になって姉ちゃんに国を動かしてもらった方がいいに決まっている。

それが傀儡の王だとか笑いたいヤツは好きにしとけばいい。

私は姉ちゃんがおかしくなったら尻を蹴飛ばしてやれるヤツになればいいんだ。

「――ほら、賄い出来たぞ！」
「おや、ではそろそろ終わりにしましょうか」
そうしろ。
私の折角の休日を変な事情聴取なんかで潰すんじゃねぇよ。
「では最後に。
――フェルト国王様。この国は如何ですか？」
きまってんだろ、弱いヤツも強いヤツも同じように笑い合うこの国が私は大好きだ。

フェルト国王
ナツミ姉ちゃんのストッパー・活入れ役。
休日にはロム爺の飯所の手伝いをしている。
看板娘フェルト＝フェルト国王は飯所の客にとって暗黙の了解。
～その後～
たぶん魔女教が攻めてくるけどラインハルトがぶっ飛ばす。
たぶん他国が戦争吹っ掛けてくるけどラインハルトがぶっ飛ばす。

たぶんよく分からない超常の怪物が攻めてくるけどラインハルトがぶっ飛ばす。
たぶん悪意を察して一瞬で駆けつける加護とか分身の加護、洗脳解除の加護、あらゆる呪いを浄化する加護、記憶復元の加護、やり直したい時間軸に任意で戻る加護、どうしようもなく強大な敵を星から追放する加護、己が生存している限り親しい人間は本人が望まない外的要因で死亡しない加護、最悪の未来を避ける加護だとかラインハルトはフェルトの為に自重を捨て清々しいまでのチートキャラと化す。
開発区画がルグニカで最も美しい地上の楽園と云われるようになる。
人間や獣人のハーフなどが団体で移り住む。
ペテさんがジュースさんになる。
ロム爺の盗品屋が建て替えられ飯所らしくなる。
ユリウスがナツミ嬢にハッキリ告白するが、断られる。
しかし二人もいい大人なので、その件で拗らせることはなく、以降も友人として良好な関係を続けた。
オットーが商人として大成功をおさめる。
文明レベルが百年ほど繰り上がる。
フェルトが国王であった時代のルグニカは国として最盛期を誇った。

気の強いナツミ・シュバルツは生涯独身になると思われていたが、色々あって記憶を失った青髪の鬼族の青年を保護することになり、やがてその鬼族の青年とイイ感じになる。

たぶん、失われた記憶を求めて二人で旅をして、道中で四大精霊と衝突し村を救うみたいな劇場版みたいなことをして、そのまま婚約しちゃう。

たぶん、子供が男の子と女の子二人出来て、男の子にリゲルと女の子にスピカと名付ける。たぶんこの世界のレムは男だった。

たぶん、ロズワール辺境伯と仲良くなって、いつのまにかマヨネーズ狂いのロリっ子精霊と契約している。

…老後はカララギで過ごすのではないだろうか。

たぶんエミリアは諸々の問題を全て解決して幸せに暮らす

ユー愛

僕の初恋は白猫でした。

正直、自分でもどうかと思いますがその当時の僕は人間関係と言うものに嫌気が差していたのだと思います。

そんな折『言霊の加護』を持つ僕はあの白猫の優しさにコロっと傾き、そしてやはり初恋は実らないといいますか、想いも告げぬまますぐに破局してしまいました。

そのあと直ぐに街の権力者の娘を敵に回し故郷を追放されまして、スーウェン家の生まれの僕は実家で培った技術を生かして思いがけず行商人として独り立ちすることになりました。

「……ここか」

まだまだ日の浅い新米商人。いつか自分の店を持つんだと心に決めて、初めての取り引き先として僕が選んだのはシュバルツ家のご令嬢だったのです。

※※※※※※※※

「起きましたか？」

「……あ、頭が痛いです」
温かな湯呑みを差し出してナツミの顔色を伺う。
青ざめたナツミ嬢は覚束ない手つきで受け取って、弱々しく喉を鳴らした。
本物の病人みたいに酷い面だ。
これは単なる二日酔いなんてものじゃない。不摂生な生活習慣や事務職の重労働、はてやストレスなどが一気に爆発して肉体が悲鳴を上げているのだとオットーは思う。
「一応、聞いておきますけど最後に睡眠をとったのはいつですか？」
「どうだったかな。五分、十分ぐらいのなら小まめに取るようにしているけど、ちゃんとしたのは十五日前ぐらいかも」
「馬鹿ですか。死にたいんですか貴方？」
「そう言うなよ。最近はこれでも休めるようになってきたんだぜ」
なら道端で倒れるなんてこと勘弁してもらいたい。
偶然通り掛かったオットーが、路地裏でアワアワと狼狽える帝国最強の戦士からナツミ嬢を預かり受けて彼女の屋敷へと運び込むこの珍事態。
貴族にでもバレれば面倒なことになるに違いないと、ここに運ぶまで誰かに見られてないか気が気ではなく…凄く胃がキリキリとした。
「前々から言っていますが、貴方は自らの地位に自覚を持つべきだ」

「そうは言ってもべつに演説とかする訳じゃねぇし、ただ政策を建てたりチェックしたり――」

「たとえ貴方自身が意図しなかったものだとしても、今世間は貴方に注目しているんです。倒れるぐらいなら無理言って休みましょうよ、頼みますから」

言葉を濁すナツミは呆れるようなオットーの物言いにバツの悪そうな顔をした。

まるで親に叱られた子供のようで、昔からこの人は、実力と精神がチグハグだからやりにくいんだよなぁとオットーは思う。

「……ま、貴方に頼まれていた件も済みましたし、これからは僕も仕事を手伝えますから」

放ってほくとどこまでも馬鹿みたいに走り回って痛い目を見るまで止まらない。

「マジかよ！お前がいれば百人力だよ、オットー！」

だから友人である僕がちゃんと支えて上げなければと毎回思うのだが――、

「もうっ大好き！」

色々と限界の来ていたナツミ嬢は思わぬ助っ人の登場に感極まって、愛の言葉を叫びながら抱きついてしまった。

これにはオットーも驚いたが、ナツミさんのことだ。

これが友愛からくる包容であることぐらい分かっていると、そこそこ長い付き合いな

ので瞬時に理解し、ナツミ嬢が倒れてしまわないようにと優しく受け止める。その時、扉が勢いよく開いた。

「ナツミ！倒れたと聞いて来たが大丈夫……か？」

青髪の騎士。王選候補者アナスタシア・ホーシン様の一の騎士にして近衛騎士団所属――ユリウス・ユークリウス。

なんだ態々お見舞いに来てくれたのかと呑気に思うナツミ嬢とは反対に、ホーシン商会の売り出す書物に目を通していたオットーは世界から色が消え全身が凍りついたような錯覚を覚えた。

（あ、僕死ぬかも）

抱きつくナツミ嬢とオットー

放心するユリウス

イアさん「きゃー！薄い本が厚くなっちゃう！」

ナツミシュバルツはトモダチが、ホシイホシイホシイホシイホシイホシイ

あの娘に抱いた感情が、恋愛ではなく友愛であることを私は今でも後悔している。
もし、あの時。
我が友ラインハルトではなく私が彼女の手を握っていれば、未来はきっと変わっていただろう。
シュバルツ家に突如として発生した魔獣の群れ。そして現れた黒蛇（こうじゃ）の切れ端。
物語などで云う、分かりやすい展開だった。

きっと、あの時。
私がナツミを選んでいればもしかすれば、ナツミも私を――。

「なんだ、わざわざ来てくれちゃったの。

お前も忙しいだろうに、ありがとよユリウス！」
あまりにも場違いな声色でナツミは友人を歓迎する。
ダラダラと汗を流すオットーは「この女、気でも狂ったか！」と内心叫んだが、「そう言えばこの人、こういう人だった」と、顔を青くして恐る恐るユリウスを見る。
「……元気そうでなりよりだ」
端的で、とても衝撃を受けているようには見えないとオットーは感じた。
少なくとも、想いを寄せている女性が見ず知らずの異性と抱きついている様を直視する男の目ではない。
もしやユリウス・ユークリウスがナツミ・シュバルツに想いを寄せているという巷を潤せる色恋の噂はホラだったのだろうか。
だとすればオットーの恐怖は取り越し苦労となるわけで、でも国のトップにこれまた堂々を抱きついているのを他人に見られたのはそれはそれで不味い状況ではないのかとハラハラとしていると、
「――――何泣いてるんだ？」
一滴の涙がユリウスの頬を流れていた。
「あ……いや、何だろうなこれは。私にも分からない」
疑問の声を上げたナツミに、戸惑うように涙を拭うユリウス。

「何もないのに涙が出るなんてことないだろ。
何か変な病気とかだったらどうする。フェリスを呼んでやるから取り敢えずうちの屋敷で休め」
「いや、本当に問題ない。きっと目にゴミでも入っただけだろう」

（……やっぱッうわあああああ!!!!!）

修羅場、修羅場、修羅場。あまりにも修羅場。
オットーの胃袋は雑巾のように絞られて、そのあとにミキサーにでも掛けられているようだった。
――物凄く気まずい。
色恋をお題にしたナツミの朴念仁さは、もはや同性と接しているレベルだが、これはあまりにもないんじゃないかとオットーは目と目の中央に深い皺を作る。
「ナツミ様、いくら何でもその言い方は……いえ、レムはそんな色恋に初なナツミ様も大好きなので構わないのですが」
さすがに聞き咎めたのか青髪のメイドさんがユリウスをフォローするつもりでナツ

ミに耳打ちする。
「そうか……？
体調が悪いなら多少業務に支障をきたしても休むべきだと思うんだけど……やっぱりブラックなのかなそこら辺。
これは騎士団の業務に対する意識改革にもその内手を出さねえといけないかも」
むしろ生理的に受け付けないので無理だと断られたほうがマシのフラれ方である。自分とて想いを告げられぬまま初恋を終えた身の上であるが、このようなフラれ方をしたら普通は立ち直れないと思う。
オットーは平気そうな顔をするユリウスの肩が僅かに震えているのに気付いた。
ハッとする。
……たぶん耐えているのだ。ユリウスはこれからの関係を維持するためにも、一欠片も自身の恋慕に気付いた様子のないナツミ嬢に要らぬ気苦労を背負わせないようにと沸き上がる激情を寸前で抑えている。
「な、ナツミさん。この状況で何ですが仕事の話をしたいのですけど」
これ以上は見ていられないと、オットーは手を上げる。
「おう？
ま、お前のお陰が大分楽になったからそれは構わねえけど……」

「ユリウス様は客室でお待ちになられますか？」
「……いや、ナツミの状態を確認しにきただけだ。私は帰らせてもらうよ」
青髪メイドさんの言葉にやんわりと断りをいれるユリウス。
やっと、この地獄のような時間が終わりそうだとオットーはほっと息をついた。

「ナツミ、帰る前に一言いいだろうか？」
「何だ？」
「私は君の良き友になれているだろうか？」
「何言ってんだよ。お前以上の友達（ダチ）なんていねーよ」
「そうか……」
ユリウスは少しだけ頬を持ち上げて屋敷をあとにする。
ナツミにはその笑顔が何故だが印象的に感じた。

ナツミ・シュバルツは友達が欲しい

『――かくして、影の女王と最優の騎士は結ばれましたとさ。めでたし、めでたし』

ルグニカに構えるホーシン商会のとある一室。

紙にペンを走らせるアナスタシアは、苦しげに唸った。

「う～ん、悪うはあらへんけど今一しっくりけえへんな」

現在彼女が執筆しているのはホーシン商会で大々的に売り出し中の『影の女王と最優の騎士』という恋愛小説だ。

元はナツミ・シュバルツとユリウス・ユークリウスを参考に趣味の一環として彼女が始めたものであるが、あれよこれよと人気が募って、いつの間にか近隣諸国を渡り行くほどの近年希に見る大ヒット作となってしまった。

これでも商人や王選候補者として忙しい日々を送る中、中々執筆作業に時間を割けないので、年に一冊出せるか出せないかのスロースペースだったが、ファンも離れることなくむしろ助長して全二十三巻を持って完結するまで漕ぎ着けた。

これだけの人気なら蛇足してもう少し稼ぐことも出来るのだが、これを始めた当初、

手紙で感想をくれたファンの一人に二十三巻ぐらいで完結させてみせると公言してしまっている。

アナスタシア自身もそれぐらいで構想を練っていたし、一度決めたことは絶対に曲げないのが彼女の流儀だ。

本当は未回収のフラグとか設定上現れても実際に描写されていないキャラもいるのだけれど、この物語の本質はナツミお嬢ちゃんとユリウスが結ばれるまでの『過程』

そこを違えて物語の質を落としては元も子もないと、あえて暈した所は読者の想像に委ねることにした。

ゆっくりと書き上げた紙の束を取ってペラペラと読み返していくアナスタシアは、『影の女王と最優の騎士』完結という文字の前にその手を止める。

「……やっぱユリウスからナツミちゃんに告白するのは、現実的に考えても一番あり得そうやけど、ナツミちゃんがこないに素直なええ返事をくれるわけがない」

物語のクライマックス。色々な困難を乗り越え、やっとのこと自分の本当の想いに気付いた最優の騎士がついに影の女王に告白するシーン。影の女王は今までの益荒男のようなイメージから一変、頬を赤らめ生娘のような反応を見せて、「はい！」と粋のいい返事を返すのだが……どうにもこの展開が負に落ちない。

自分の知るナツミお嬢ちゃんなら、何と言うか……この世のものとは思えない下手物を見たかような分かりやすい拒絶の意を示して断りそうなのだ。

ユリウスはどこに出しても恥ずかしくない立派な一の騎士だが、そこはやはりナツミお嬢ちゃんの精神が男に寄りすぎているのが原因だと思う。

いっときは、〝そういうもの〟なのかとアナスタシアも勘繰ったが、化粧はするし可愛い服や綺麗な装飾品には「自分の魅力を引き上げられる」からと目がないので、単純に色恋沙汰に興味がなく、逆に感心がないものだから必要以上に毛嫌いしてしまうのだろう。

ただでさえ誰にでも性差なくあたってしまうナツミお嬢ちゃんを、恋愛の空気にもっていくのは大変なのに、欠片も興味がないのだから、やりずらいったらありゃしない。

「はぁぁ〜」

二人の関係は悪くないし、ナツミお嬢ちゃんもちゃんと結婚して子供を作って後継を育てる重要性は理解している。

ちょっとした切っ掛けさえあればあの二人は結ばれる。だから義務とか責任で圧し固めて二人を強引に結びつけるのは簡単だと思う。

けれど、二人にはちゃんと愛しあってもらいたいとアナスタシアは思っている。

国の為に尽くし愛のない形だけの家庭で生涯を終えたり、一方的な愛を囁くばかりで

は閑古鳥も鳴こう。
そして何よりも、見ていて甘酸っぱくなる彼らの関係がそんな苦いものに落ち着いてほしくない。
何とか砂糖ドボドボの関係になってくれればとこれまで後押ししてきたが、結果は芳しくなく――
唯一良さそうな雰囲気だった時はユリウスがナツミお嬢ちゃんが触れてほしくない特大の地雷を踏み込んであえなく撃沈。
今のままだとユリウスが勇気を出して告白しても、ナツミお嬢ちゃんは断る。
いや、断るだけで済めばいいがお互いに変な空気感になって、そのまま疎遠になりそうだから、むしろ今勇気を出すなとアナスタシアは言いたい。

「……どないしよう」

影の女王と最優の騎士はあくまでもフィクション。
フィクションと現実は違うが、二人を元にしただけにかなり二人とキャラが似た寄っている。
高圧的で、天然で、努力家で、変に面倒見がよくて、他人の痛みを理解出来るが、自

分のことはいつも二の次。
失敗したら、ひたすらに抱え込んで、心をボロボロにしていく。表の顔を見ているだけでは分からない痛々しいまでの自己犠牲にあふれたヒロインの影の女王。
そんな彼女が友達が欲しいと、初めて願って初めて出来た友人の最優の騎士は彼女の良い所も悪い所も全て受け止めてくれた。
彼は、本当の意味で孤独な女王を支えられる存在になろうと友として準じるのだが、それが成長する内に恋心が芽生えて、段々と友達が欲しいという彼女の願いに葛藤していく様や、そんな自分に嫌気が差しているのではないかと、心暗くしていく影の女王。
ナツミお嬢ちゃんは、恵まれた友人達によってそのような自体には陥ってないが、どれだけ才能があって努力してもやっぱり人間だから失敗はするし、支えてくれる人間がいないと、ナツミお嬢ちゃんの性格からしてどんどん沼に嵌まっていくタイプだ。
この物語は最優の騎士以外に頼れるものがいなかった場合のナツミお嬢ちゃんのＩＦのような話。
現実のナツミお嬢ちゃんでは考えられないほど、精神的に追い詰められて、自暴自棄になり、途中自我が崩壊する状態にすら陥るが、それでもナツミお嬢ちゃんは芯が図太い人間だ。
どれだけ参っても根っこの部分は変わらない。

だから、これだけお膳立てして好感度稼ぎらしいことをしても、告白をＯＫした途端に胡散臭くなるのだろう。

「……ん？」

告白シーンを改修するのは確定として、何を足せばナツミお嬢ちゃんらしくなるのかと完全にペンの止まってしまったアナスタシア。

背後の扉がコンコンコンと叩かれる。はて、今日は用事などなかった筈だと首を傾げるアナスタシアは意外な来客に目を見開いた。

「アナスタシア様、少しよろしいでしょうか」

「…ユリウス？」

※※※※※※※《エミリア》

ジメジメと今にも降り出しそうな曇り空。

綺麗に舗装された街道を浮かない顔をして歩く。

（明日、パックの話だとロズワールはナツミ・シュバルツさんと会談する、か……）

私が王様になれば、きっと一番付き合いが長くなるのはその人になる。だから会っておいて損はないとパックは言うけれど、自分はナツミ・シュバルツさんがどれだけこの国で頑張ってきたかを知らない。

ただこんなに素晴らしい国を作るなんて凄い、と思うだけ。

「変な人だって思われるのかな」

今のエミリアには自分が王様となった場合、どのようにしてルグニカを導いていくのか目標がない。

それに王選候補者として何かするわけでもなく、ロズワールの用意した王都の屋敷で大人しくしているだけ。

ナツミ・シュバルツはその間に絶え間ない業務をこなしてルグニカを支えているだろう。

…考えれば考えるほど自分が嫌になる。

エミリアのそんな感情に共鳴するかのようにポツリと落ちた滴が絶え間ない豪雨となって、彼女に降り注いだ。

「……はぁ」

エミリアはそれに少しだけ苛立ちながら屋敷へと踵を返す。

そして少しだけ近道をしてしまうおうとリンガの屋台近くにある路地裏に入った。

「〝ロマネ・コンティ司教は魔女の因子を失っていない。彼は福音に従い、ナツミ・シュバルツの暗殺を決行しようと企んでいる〟」
「――――はぁ…はぁ、」
「…やはりダメですか。ならば仕方がありません。
今の彼女と私が会うわけにもいきませんし、誠に悲しいことですが本日を以て、怠惰の席は永久欠番といたしましょう。

――では、ペテルギウス・ロマネ・コンティ司教、よい旅を」
その端で、男の人が蹲っていた。
「私は……誰…いや、私は愛に、魔女に寵愛を……？
いや、違う私は…私は、私は！」
暗いローブをした緑髪の男の人。
顔は死人のように白く、支離滅裂に叫び散らし胸を掴んで辛そうに喘いでいる。
……どうみても普通の状態ではなかった。
パックが外に出られる時間も過ぎてしまった今、危ないヤツには近づかないと約束し

ているエミリアはきっと気付かないふりをして通り過ぎるべきだったのだろう。
――だけど
その後ろ姿を見ていると、寂しさなのか、悲しさなのか分からない不思議な感情が胸に宿る。
「あの、大丈夫ですか？」
エミリアは少しだけ迷う素振りを見せて、男に声を掛けた。
「……あ」
私の存在に気付いた男はハッと顔を上げて、充血した男の目とエミリアの紫色の瞳が重なる。
「エミリア……」
掠れた吐息が最後。
気絶した男の答えに、エミリアは目を見開いた。
「え、わたし貴方に名前を――」

※※※※※※※《ガーフィール》

「――――これ以上は持っていけねぇから次の竜車に乗せろ」
ぶっきらぼうな物言いに、「あい、分かったよ」と犬耳を垂らして自分の前を去っていく老人にガーフィールは盛大な息を吐く。
「たく、何で俺様がこんなに面倒なことを」
―仕方あるまい、ガー坊が試練を突破したのだから。
皆ガー坊を頼りにしているのじゃ―
ガーフィールの首にかける結晶石（ペンダント）から幼子の声がする。
「…出てきて大丈夫なのかバアちゃん」
―生身であったころより大分窮屈だが、問題はないぞ―
心配そうに問い掛けるガーフィールに大丈夫だと言葉を送る。
彼女は少し前まで人の体で存在していたが、聖域の解放に伴い、大怪我を負ってそのままだと生死に関わる事態になり『ナツミ・シュバルツにあーわーせろー！』と、子供のようにわめき散らす強欲の魔女に頭を下げて精霊を結晶石に封じ込める手段を聞き

出し、どこか死を受け入れ気味だった彼女をガーフィールらで強引にこの中へと閉じ込めさせてもらった存在だ。
元はぶっきらぼうな性格のガーフィールも流石にその事を気にしているのか、彼女と話す時は少しばかり覇気がない。
『儲け話の陰にデリデリデあり』だが、俺様にここまでさせたんだ。
そんな理不尽を俺は認めねえし、認めさせるつもりはねぇ！
ナツミなんちゃらだとか言う影の宰相…この俺様が直々に見定めてやるぜ！」
と、思えばそれは錯覚だったのか、直ぐにいつもの調子に戻った。
―そんなこと言って、死んだかと思っていた母親に会いたくて仕方がないのじゃろう―
「……うるせえ！
兎に角、俺は――父さんのことも母さんのことも！自分の目で見るまで信じねぇ！」
言葉ではそう言っているが、表情全体を見なくとも分かるぐらいガーフィールの頬は嬉しそうに弛んでいる。
それにカラカラと結晶石の中で笑うリューズ・ビルマは、きっとこれから素晴らしい未来が待っているのだろうと待ち遠しく思う。
ルグニカの王都。全ての種族が差別なく暮らすという楽園を。

※※※※※※※《ナツミ・シュバルツ》

「さぁて！今日も仕事頑張るぞー！」

書類の束を机に下ろして、パンッと頬を叩くナツミ嬢。

明日にはメイザース辺境伯との会談の時間もあるのだし、その時間分まで今日中に終わらせて見せるという彼女はいつになくやる気だ。

早速、期限の迫っているものから取り掛かろうと手を伸ばしていく。

「そう言えば、もう聖域からの受け入れの時期か」

五枚ほど書き終えた時、一枚の紙が目に止まる。

これはナツミが偶然助けた獣人の女性からの要望で、オットーと協力して長いスパンで進めていた計画の一つだった。

先日のオットーの話は、聖域という種族間を跨いだハーフ達を守護又は幽閉する聖域と呼ばれる場所。その来るもの拒まず去るものを許さない強力な結界の解放に付いて、住む家を失った住人達の受け入れ先と働き場所の提供。そしてオットーに任せていた自称門番を名乗るガーフィールという少年を説得して見事、聖域の解放を達成したという嬉しい報告であった。

ナツミは感傷深く頷いて数百人規模の移住希望にサインする。
「一度聖域の人達には俺から話を通しておかないといけないし……また俺の時間が短くなったな。
くそぉ、俺の知る異世界転生と何もかもが違えよ」
僅かに涙を浮かべて、少しばかり自らの不幸を嘆いてみる。
そこからニヤリと笑い、高らかに声に出して言った。
「だが、働き疲れて諦め癖だなんて下らねえ。
どこまでも俺をブラックに突き進めるというのなら、突き当たる壁すらぶち破って、どこまでも走り抜けてやる。
……運命様上等だ！」
別に望んで転生した訳でもないし、夢にまで見た銀髪エルフはいないわ、性転換してるわ、ホワイト公務員になったと思ったらブラック企業に強制転職させられるわで、散々な人生……だが、
この世界に来て、たくさん友達が出来た。
実は、この世界に生まれてから前世のことは段々と忘れていって――いつかナツキ・スバルと決別する時が来るのだと覚悟している。
今は父親や母親の顔がうっすらと分かるぐらいで、自分が馬鹿やって二人には散々迷

惑をかけてしまったとしか覚えていない。
もし自分からナツキ・スバルが綺麗さっぱり消えてしまった時のことを考えると、どうしようもない不安に襲われるが、ナツミ・シュバルツには支えてくれる友達がいる。
彼らがいればどんな困難にも立ち向かえる。そう信頼しているから俺は今を笑うことが出来る。

「ただのナツキ・スバルと違って、俺様は手強いぜ。
何せ、ナツキ・スバルとナツミ・シュバルツの二人分＋友達全員が俺の力になってやがる。
俺を殺したきゃ、あれだな……。
ラインハルトを五ダースは揃えないと無理だから、そこんとよろしく！」

ナツミ・シュバルツは友達が欲しい【完】

ありがとうございました。

本編につきましては、これ以上続けると『リゼロ』になる……といえばいいのやら、ナツキ・スバルの記憶を完全に失ったナツミ嬢がメンタルボロボロになったり、ロズワールは相も変わらず暗躍し続け、魔女が介入してきたりと、シリアス展開ばかりで、少々強引ではありますが『平和なリゼロ』がテーマのこの世界で締めくくる為に、これにて完結とさせて頂きました。

一応、続きみたいなのがありますが本編は完結したという扱いでお願いします。

おまけ　魔女の茶会
屋敷精霊の愛読書

ナツミ・シュバルツという新世代の怪物により今や楽園都市と評されるルグニカ王都。

各国から行き交う商工のたまり場であり、日々真新しく街が変貌していくのに比例して急激に地価や物価も上昇していく。

それは市民階級の者が新たに居を構えたり、独り立ちをした子供が家を買うことが出来なくなるのではないかと一部の人間は危惧したが、やはり鬼才ナツミ・シュバルツの名は伊達ではなく、彼女の計らいあって、移住者や市民階級のものは申請をすれば国が補助してくれるようになった。

しかし、たらふく私財を抱え込んでいる貴族にはその必要なしと……賢人会ですら新たに別館を用意することを躊躇う中、ロズワールは先日の魔女教大罪司教の襲撃を受けて、新たに購入した屋敷のベッドの上で困り顔を浮かべていた。

そわそわ　そわそわ　そわそわ　そわそわ

「あー、私の心配をしてくれるのは嬉しいーのだけれど。少し落ち着いてくれないかな。

ベアトリス？」

本来であるならば、メイザース領に構える屋敷の禁書庫から滅多に離れることはない人工精霊のベアトリス。

フリフリとしたツインテールに赤いドレスを纏う、見た目だけなら非常に愛らしい少女だ。

ロズワールは今回の一件で重傷を負って、彼女に無理を言って駆けつけてもらい治療を受けていた。

「だからナツミ・シュバルツに喧嘩を売るような真似をするなとベティーは忠告したのに！」と頬を膨らませてご立腹の彼女を適度に宥めながら、何とか一人で立ち上がれるほどに回復した。

「ふん、かしら。

別にベティーはお前のことが心配で王都に来たんじゃないかしら。ベティーが王都に来たのは、

――影の女王と最優の騎士のサイン会があるからなのよ!!!」

頬を赤くして、とても待ち遠しそうに懐にある一冊の本を抱き締めるベアトリス。

影の女性と最優の騎士……はて？と一瞬何のことだろうかとロズワールは首をひねって、そう言えば最近そのような書物が流行しているのを思い出した。

只でさえ、本好きの彼女だ。いつその本を手に入れていたかは置いといて……反応を見るに、とても面白かったのだろう。

何せ、強欲の魔女エキドナ様の言いつけを破ってサイン会に駆けつけるほどだ。

「ほぉ、君がそこまで評価するなら、私も読んでみよぉーかな」

歩けるようにはなったとはいえ、十分安静にする必要がある身だ。暇潰しにはちょうどいいかもしれないとベアトリスが持つ本に視線を向けるロズワールは「……今なんと？」猛禽類のようなギラつく瞳をしたベアトリスに失言だったことを悟る。

「やっとロズワールもこの本の素晴らしさに気づいたのかしら！

ベティーは読む用、鑑賞用、保管用、禁書庫に飾る用、布教用の五つを持っているから、布教用を上げてもいいのよ！その代わり読み終わったら感想を聞かせてもらうかしら！双子メイドと談義するのも楽しいのだけれど、こういうのって多い方が面白いの！影の女王と最優の騎士は二十二巻出ているから、当然ロズワールには一巻目から読んで貰いたいのけど、あー！でもね、十三巻から読んでみるのも悪くないと思うのよ！十三巻は最優の騎士の弟の話なんだけど、その子が影の女王に一目惚れしてしまって、それ

が後に判明する……」

これは、囲い込まれるやつだ。

歪な関係

エミリアがこれほどまでに緊張したのはロズワールと初めて会った時以来だ。

パックが眠りについてから起きるまでの約半日。

倒れ伏す大の大人を背負って近場の病院まで運び、一人で手続きを済ませるなんて。

――もし、パックが起きていればずっと早く済んでいたかもしれないけど、どうしてだか彼をパックと会わせるのはとても不味い気がして、何枚もの未知の紙面とにらめっこすること数時間。自分一人でやり遂げてしまった。

「いい、ぜーたいこの部屋から出ちゃだめよ」

「……」

未だ目覚めない男を医者に任せて後にする。万が一目覚めた場合はロズワールの屋敷に連絡がいくように病院側へ話を通しておいた。

我ながら抜け目ないというか……エミリアは自分は思ったよりも頭が固いタイプの人間であることを思い知った。

そのお陰で一睡もしていない。今日はナツミ・シュバルツさんとの大事な会合があるというのに酷い隈である。

「ふふ」
姿見で隈の具合を確かめていたエミリアは、こんなになるまで頑張ったのはいつ以来だろうかと思い返し、その記憶の中に自分と同じような隈を浮かべて頑張っているであろうナツミ・シュバルツを思い浮かべて小さく笑う。
こんなことで追い付けたと思っていてはナツミ・シュバルツさんには鼻で笑われてしまわれるかもしれないけれど、この隈が誰かの為に頑張った証だと思うと、すぅーと胸の内が軽くなる。
「リア、おはよぅーうわ！どうしたいんだい、その隈？
まさか、緊張して眠れなかった？」
「ううん。そうね、緊張して眠れなかった。
私、ナツミ・シュバルツさんと話すのがすごーく楽しみよ」
「……乙女が夜更かしなんて感心しないけど、今回は見送っちゃう。でも流石にその状態で人前に出すなんてお父さんは見過ごせないかな。綺麗におめかししましょう」
パックに連れられて白い粉やクリームみたいなのを顔に塗る〝おめかし〟を済ませると、ロズワールからお呼びがかかって私たちは竜車に乗った。
てっきり、ナツミ・シュバルツさんが此方にくるものだと思っていたけど、そんなことを聞けばロズワールは苦笑い。

「今のルグニカで彼女を呼び寄せることが出来る存在がどれだけいましょうか……少なくとも、私にはそのような権限はありませんよ」

賢人会ですら、ちゃんとした理由がなければ難しいのだ。

辺境伯である私にはとてもとても……。

それというのも、この会談はナツミ・シュバルツさんのご厚意で開催が実ったものらしく、ほとんど彼女と接点のなかったロズワールが多忙な所に無理を言って叶えたものらしい。

また此方に招くという行為は外聞が悪く、シュバルツ邸やロズワールの屋敷ではない第三の会場を使うという手もあったが、下手に大きく動いて他の陣営に警戒されるのも面白くないのだそう。

故にこれは、公的なものではなく、あくまでも個人的なお話の範疇であるのだそうだ。

エミリアにはこれほど準備したのに個人的なお話になるという意味が今一理解出来なかったが、パックが「ようは、ナツミ・シュバルツとの会談が他の陣営にバレなければいいんだよ」エミリアが気にすることではないと優しく諭した。

「エミリア様は楽になさって問題ないかと。ナツミ・シュバルツ様は寛大で知られるお方です。私の用が済めば後は貴方様の望むがままに質問なさるとよろしいでしょう」

「ありがとうロズワール。私も頑張ってみるわね」

シュバルツ邸に竜車が停止し、扉が開く。
従者に促されて竜車から降りるロズワールとベアトリスと私。
「お待ちしておりましたロズワール様、ベアトリス様、エミリア様」
「――――えっ!?」
そこで彼女達を出迎えたのは予想外な人物だった。

「――――レム?」
なんとエミリア達を出迎えたのはロズワールの屋敷で双子の姉と一緒にメイドをやっている鬼族の少女レムだった。
「なんで、貴方がここに……ロズワールは知っていたの?」
「ええ、勿論。今の彼女は度々我が家の業務を手伝ってくれますが正式にはシュバルツ家のメイドです」
「そうなんだ。じゃあラムも……?」

「……いいえ」
　最近妙に休みを取ることが多いとは思っていたが、まさかナツミ・シュバルツさんの屋敷で働いていたなんて。
　私やお姉さんのラムも驚いている。
「申し訳ございません、姉様。ロズワール様の命により少し前からこのお屋敷で働かせていただいておりました」
「ロズワールの命……そういうことなら仕方ないわ。むしろレムの些細な変化に気付かなかった私が悪いのよ」
　申し訳なさそうに視線を下げるレムをラムは優しく抱き寄せる。
「私の方こそ、レムはこのお屋敷での仕事もあるのに、いつものように仕事を任せてごめんなさい。これからは私一人でも頑張れるように努力〝は〟するわ」
「いいえ！あれは私が好きでやっていることで！」
　ほわほわとした空気。
　こういう時、姉妹って素敵だなとエミリアは思う。
「おい双子の妹のほう。さっさと案内するかしら」
「申し訳ありませんベアトリス様。すぐに案内いたします！」
　ベアトリスの言葉にレムは慌てて屋敷の扉に手をかける。

「ナツミ様は客室にてお待ちです」

友達という鎖

賢人会とナツミ・シュバルツの対立は彼女が王選候補者でないと判明するまで、ナツミ・シュバルツが仕事を押し付ける賢人会を一方的に嫌っている可愛いものであった。

貴族達も、新参の小娘が何を……と心の中では思うも、あれこそが王の器かと密かに尊敬の念を抱いていたのだろう。

それが彼女が王の資格がないと龍によってみなされると、そんなものに国を任せてもいいのかと賢人会や貴族らの間で問題視する声が上がり始めた。

ナツミ・シュバルツは王になるべき素晴らしき存在だが、このルグニカを守護する龍はナツミ・シュバルツが王になることを望んでいない。

ナツミ・シュバルツを王にすればルグニカは最盛期を誇るだろう。しかし龍は我々に愛想を尽かして……又は怒り、攻撃を仕掛けて来るのではないか。

後者においては、ラインハルトがいるので問題はないが前者の場合は最悪だ。

ナツミ・シュバルツは稀代の天才だが、その子供まで才能を引き継いでいるとは限らない。ナツミ・シュバルツの後継が没落した時、後ろ盾となる龍は姿を消している。たった一代の栄光の為に国の未来を賭けるのはどういうものかと首を捻った。

万年の平和を望むならば、龍の盟約に準ずる事が正しい。
悩みこそすれど、そう結論を下されるのは時間の問題だった。
ならば、ナツミ・シュバルツが王選候補者の誰かについたのならどうだろうか。

※※※※※《ロズワール・L・メイザース》
「どうか、弱力な我々にご力添え願えないでしょうか？」
「それは出来ない相談です。私はクルシュ陣営に肩入れしている身ですので」
この王選は実の所、ナツミ・シュバルツが龍に選ばれた瞬間に破綻する筈だった。
それが彼女が選ばれなかった瞬間に……少しでも勘の良いものなら悟ったのだろう。
ナツミ・シュバルツを手に入れた陣営が次代の王となると。
ロズワールは彼女こそが自らの野望に悲願の矢を射る存在であることを理解していた。しかし現状、エミリア陣営へと引き込むには手札が少ない。
「そーうれは、残念ですね」
ナツミ・シュバルツの答えに道家（ピエロ）の面をしたロズワールは頬に小さなえくぼを作る。
ナツミ・シュバルツが既にクルシュ陣営と懇意にしているのは〝知っていた〟
それでも自分がこのような助力を嘆願をしたのは〝必要〟であったからだ。

今回の会合で自分がするべき事が終えたという安堵の笑み。ロズワールがそのような余裕の態度でいられるのは、彼女がエミリア陣営に寝返る可能性を揶揄しているのか。

後はエミリアがナツミ・シュバルツと好きに話していい、そう視線を送ってナツミ・シュバルツから視線を外す。

「あの、ナツミ・シュバルツさんは何でこんなに頑張れるんですか！」

「頑張れる……？

それは私の仕事のことですか、それとも生きることを諦めない的なやつ、ですか？」

間を挟んで、紅茶を手にしたナツミ・シュバルツは困惑げに眉を歪めた。

突然主語もなしに何を頑張れるかと問い掛けられていても、質問の意図が分からない。

「あ……仕事のことです」

顔を赤くして小さく呟くエミリア。

「それなら簡単です。それが義務であるから、そして私自身が生き甲斐として感じているからですね」

「私、王選候補者なのに、他の人達と違って…何もない。それでも私は王様になりたい、どうしたら貴方のようになれますか？」
「私のようになってはダメでしょう」
「――え？」
「確かに、私は国の政策に口を出して、時々大規模な変革に携わることはありますが、私が思うにそれは王の在り方じゃない。
　このルグニカに求められているのは……なんでしょうね。少なくとも、脱落した私を見習うのは賢い行いとは思えませんよ」
　苦笑いするナツミ・シュバルツ。
「そんな、選ばれなかったからって脱落なんて！」
　エミリアは貴方以上にこの国の王様に相応しい人なんていないと否定したかった。
　たとえ龍が選ばなかったからって、こんなに素晴らしい国を作った人だもの。
　見た目はとっても綺麗な素敵な人で、言葉使いも丁寧だし、私の話もちゃんと聞いて答えてくれる。
「私はたとえ王選候補者に選ばれても、王様になるつもりはありませんでした。
　誰かの後ろにいる方が性にあっています」
　つまりナツミ・シュバルツの行動原理は王になるために尽くされたものではないと言

うことだろうか。
　きっとこの人が王様になればもっと良くなる筈だって心の底から思うのに、どうして……と、一瞬自らの望みすら忘れて、幸せそうにしていた王都の人達の笑顔が脳裏を過る。
「……」
　だからどうしたと言うのだ。自分は村の人達の為に王様にならないといけないのではなかったのか。
　本当に自分は優柔不断だとエミリアは項垂れた。

「言葉に詰まって、胸が辛くなったら友達に相談してみるといいですよ」
　ナツミ・シュバルツさんからの助言。
「私…友達なんて」
「なら、私と友達になりましょう」
　差し出された手が「友達なんていない」と言おうとしたエミリアの瞳に映る。
「どうして……」
「ナツミ・シュバルツは友達が欲しいと思った。
　貴方のような素敵な人と友達になりたいと思うのはいけないことですか？」

まるで当たり前のように困っている私を助けようとしてくれるナツミ・シュバルツさん。

（……この人は、とても優しい。だから頑張れてしまうんだ）

だからこの手を取ってしまえば私は彼女の優しさに甘えてしまう。

これからきっと、私はこの人に沢山迷惑をかける。

どうでもいいこと、とても大切なこと。

友達なんて関係とは思えない一方的に依存してしまうものになってしまうだろう。

エミリアはゆっくりとその手を押し戻した。

「ごめんなさい。今の私に貴方と友達になる資格はないから」

「…そうですか。では、貴方と友になれる日を楽しみにしておきますね」

少しだけ悲しそうな顔をしたナツミ・シュバルツにエミリアが胸が痛くなる。

それでも、今の自分が彼女の友達になるのはいけないのだと、喉からせり上がりそうになる弱音を飲み込んだ。

友達の終わり／束縛された願い

「やったー！なのよ！」
ベアトリスは両手で抱える本を抱き締めてピョンピョンと跳びはねる。
よほど嬉しいのだろう。最後のページに書かれた文字を見返してはニヘラと表情を砕き、くるくると回っている。
「そんなに面白いのかしら、あれ」
「どうだろう。でも僕のアイデンティティである『癒し』が奪われかねないなら、気が気じゃないね」
あれほどパックにご執心だったベアトリスだが、試しにパックがその回りを飛んでも見向きもしない。
ガーンとショックを受けたようにパックはエミリアの肩で力なく項垂れる。
「う～む。私の見立てだと三日はあの調子だぁーね」
それにロズワールは苦笑い。もう『影の女王と最優の騎士』という書物は精霊を狂わす力でもあるのかと疑い始めてしまったほどだ。
「そんなに人気ならお見舞いに持っていこうかしら」

「お見舞い、誰の？」
「うえっ、な、なんでもないの！」
つい、あの男の人の話を出してしまいアワアワと慌てる。
「う～ん。怪しいな～」
「ほ、本当に何でもないのよ！」

ジクリとした痛み。
ついボーとして引き出しに挟んでしまった指の皮を見ると血豆が出来ていた。
「はぁ」
蝋燭に火を灯して細く尖った針を殺菌し、指の腹の血豆に穴を開ける。
そうすると、血が抜けてふやけた皮だけになる。
「……」
暗い部屋に蝋燭の火と治癒術の光が重なった。

「慣れたもんだな」
　その肉声とは裏腹に空いた穴は塞がらずに、血はトクトクと指先を伝う。血小板が集まって血を凝結すれば簡単に止まる筈なのに、蛇口を開けっ放しにしたみたいに机の上に血だまりが出来た。
（……あれ？）
　何かがおかしいと治癒を止めるも、ぼんやりと血が抜けすぎたのか視野が白黒になって、よろよろとよろめく。
「スバル。傷を開くなんてどうかしてると思うよ」
　背後から肩を持たれて、取り上げられた手に赤い光が灯る。今度こそ指の腹の傷は塞がって「サンキュー」と彼女は言った。

「……そうか。またか」
「あぁ、まただ。最近は頻度が多くなっている気がするよ。
　本当に心辺りはないのかい？」
「あー、うん。心辺りといえば過度な労働環境なんだが、別に裁判官の時もこうなる時はあったからな」

時刻はおおよその人間が寝静まる深夜の刻。
加護か、虫の知らせというやつかは分からないが、時たまチャンネルが切り替わったみたいに無意識に動き始める自分の前に現れて目を覚ましてくれるのが、このラインハルトという男である。
「ただ、今回は少しだけ悲しいことがあったかな」
「悲しいこと？」
「友達になろうって伸ばした手を断られた」
思い浮かんだのは王選候補者にして銀髪のハーフエルフのエミリアという女の子。
「友になれなかったことが悲しかったと？」
「――いや、私……俺からしたら滅茶苦茶タイプの子だったんだよ。でも、全然ピンとこなくて……それが、自分の根幹に関わる大切な何かが知らぬ間に変わったと思うと急に怖くなってさ。
……咄嗟に友達になろうなんて言っちゃったの。
自分の情けなさに悲しくなったぜ」
今までも何度か、自分はナツキ・スバルではない。
ナツミ・シュバルツだと自覚させられることはあったけど、それでも俺は俺なんだと自分に言い聞かせてきた。

「やはり記憶の侵食が進んでいるんだね」
「……そうかもな。最近はナツキ・スバルなんて存在は初めから存在しなかったんじゃないかと考えるようになる機会が増えてきた」
まだまだ先だと思っていたけど、思ったよりこの状態の限界は近いらしい。
「ラインハルト。もし変わっちまった私が俺の友達（ダチ）に仇なすようなクズ野郎ならその時はお前の手で――殺してくれ」
段々と消えていくナツキ・スバルとしての記憶。それが全て失くなってしまった時、果たして自分はどうなるのだろうか？
幼児退行。心神喪失。
心がぐちゃぐちゃになって自傷行為に走るか弱い女。
そんなものなら問題は起きない。
けれど権力を笠に立てて暴君のように振る舞ったり、目的の為に犠牲もやむなしという化け物が生まれたのなら……。ルグニカの権力が自分という個人に集中してしまっている今――大変なことになるのは想像に難くない。最悪死人が出る可能性すらあった。
だから、もしもの時は頼む。
もう何度、このお願いをしたのだろう。

その度に決まって泣きそうなほど辛い顔をするお前を見たくないのに、俺がナツキ・スバルでもあることをこの世界でたった一人だけ知っている

お前には、つい酷な選択ばかり突きつけてしまう。

「…もし君が邪悪なものに堕ちてしまったのなら、僕は友として君を切り裂こう」

それでこそ正しくしかあれない男だ。とナツミは言う。

「けれど、君が君であるために僕はそれ以上に全力を尽くそう。それが僕が君に示せる最大の親愛であるのだから」

その決意に満ちた強い瞳。

正しさとは残酷なことじゃないことを彼の瞳を見るといつも思い知らされる。

ナツミは大きく目を見開いて、重い息を吐いた。

――そうだ、この男はそういう男だった。

きっと、自分がそういう状態になっても、まだ助ける道を探してくれる最高に優しい友達だった。

何を一人で安心していたのか。このままだとダメじゃないか。

今のままでは、ナツミ・シュバルツの友達が死んでしまう

「……あぁ、お前だけだよ。『私』の友達は。

私の状態を知ってて、そんな言葉を吐ける人間は……」

聖母のように優しい笑みを浮かべるナツミは両手を広げてラインハルトを抱き締めた。

「スバル……？」

――だからもう終わりにしよう。

「今日は月が綺麗だな」

菜月家の朝／俺だけが知っている

全身が焼けるような傷みが襲う。
温かくも熱烈な包容に「ぐわぁ」と女は品のない悲鳴を漏らし、破瓜の傷みに耐えるよう猫のように爪を立てた。
下腹部が熱い。びたん、びたんと打ち付けられる度に心が壊れていくのを女は感じる。自らに挿入されたブツは往復する度に、徐々にだが脹らみを増していった。
(…やめろ。やめろ、やめろ、やめろ!それをされたら完全に壊れてしまう!)
気持ちいいなんて嘘だ。痛いし怖いだけ。
もう堪えられないと女は泣き叫んで、もしもの為にと用意していた自殺用の薬へと手を伸ばした。けれどかき込もうとしたその唇は、組みふせる彼の物で塞がれて――――プツリとしたコルクの栓が抜けるような感覚。
鉄臭くサラサラとした液体が口内へと流れこんだ。女は誤って彼の舌を噛み切って

しまったらしい。
「あ、ごめん」女は焦るように言う。男はそんなことお構い無しと唇を合わせ、切れた舌で貪るように口内を侵食する。血と他者の唾液という異物感に蹂躙され、女はえづいて吐きそうになった。
普段の紳士的な彼なら自分がこんなに苦しんでいるのに手を止めないなんておかしい。まるで家畜の種付けのようではないかと、ますます女の心は傷付いていく。
いっそこのまま、窒息してしまえばいいのではないか。
自分の中にある※※※・※※※の残りカスが語りかけた。

いや待て。『※※※・※※※』……？

思考の最中にノイズが入ったかのような違和感。
『※※※・※※※』。これは人の名前なのかと疑問を抱いて、
（……そうか。もう名前も）
前世の自分の名前が思い出せないことに気づいた。
これでも記憶力には自信があったので、単純に忘れた訳ではないのだろう。
女は袖をまくり上げて傷一つない手首を見る。ここには夏の日も冬の日も隠してい

た『※※※・※※※』というナイフで彫った傷跡があったのだが、それがないとなると〝この世界から消失した〟という言葉が正しいのかもしれない。
目の前にいるこの男なら、もしかしたら覚えているかもしれないけど、自分はそれを前世の名前であると認識出来ないのだろうと思う。
…なんか、急に全てがどうでもよくなった。
思えば、この半生は自己の消失という強迫観念に囚われ続けてきた。
『※※※・※※※』ならこうした筈だ。『※※※・※※※』なら出来た筈だ。望まない過剰な権力に地位や名誉。もう十分頑張ったじゃないかと女は霞んだ瞳で思う。
（兎に角さ……疲れたよ）
その最後が世界で一番目立っていた癖に、世界で一番孤独であった自分という本物を見いだしてくれた存在の手によるものならば悔いはない。

びたん、びたんと腰と腰を打ち付ける音の感覚が早くなる。
それよりも酸欠で意識が削れていくスピードの方が早い。

（さようなら、皆）

一滴の涙が頬を伝う。

「あら？」
「どうした母さん」
「……あのね。すごーく悲しいことがあったと思ったのだけれど、思い出せないの。こんなに泣いて、顔だって真っ赤に腫れているのに……どうして？」
久しぶりに見る、泣き面以外のキョトンとした最愛の人の顔。
「……そうか」
男は少し休むといいと優しく言葉をかけて、ベランダに出る。
「ついに俺だけになっちまったか」

彼の手には自分と先ほどの彼女、その真ん中に一人分ぐらいの隙間の空けられた写真が一枚握られていた。

《そのまま続く》

十回目

王選開始から数週間の時が流れた。

始まったと言っても、未だどの陣営も目立った動きをみせていない。

王都は今日も今日とてナツミ・シュバルツの別次元的で近未来的な発想により街を賑やかに騒がせている。

強いて王選候補者の中で動きを見せている者といえば言えば、『影の女王と最優の騎士』という書物を発行し、名のある小説家としてアナスタシア・ホーシンが急速にネームバリューを得ていることだろうか。

エミリアがナツミ嬢と接触し、フェルトがロム爺の飲食店を手伝っている頃。座して待つばかりであった彼女も、ついに動きを見せようとしていた。

……

……

……

「これがリンガなのか？

リンガとは白い果実ではなかったのか？」
「姫さん。それは皮を剥く前の話だ」
プリシラは高貴そうな身の着のまま、祭りに訪れた子供のようにその街を巡り歩いて、従者の男はそれを追う。
プリシラ・バーリエルは王都の観光に訪れていた。
狐の面や、カランコロンと音のなるサンダル、猫耳、文字の書かれたシャツに、龍がとぐろを巻いた聖剣のストラップなど、目につくものを片っ端から手にしていくプリシラ。それでお金を払わずに持ち出そうとするのだから、アルと呼ばれる従者は大慌てで会計を済ませていく。
「シャクリ……ふむ、どうやら嘘ではないようじゃの」
「だから言ってんだろ、姫さんの元に運ばれるまでに親切で可愛いメイドさん達が綺麗に剥いてくれてるって」
「アル。このリンガの山の中で一番甘いリンガを選んで妾へと献上せよ」
「あー、はいはい。普通に無理だから勘弁な」
余程気に入ったのか、それとも単純に足が疲れてしまったのかリンガの屋台の前で雑談する二人。
そんな彼女達の視線の先には重装備に身を包んだ兵士や魔術師の一団がクルシュ・カ

ルステンの屋敷に向けて進軍していく。
　このルグニカでは久しくあのような物々しい軍団は現れなかった為、剣や盾という見た目からして仕方ない事だが民衆はかなり不安がっているようだ。
「奴さん、ナツミ嬢に勝てないと悟って武力行使か？」
「違うな。離れるとわかれば惜しくなる美貌。妾の罪作りな神の造形に目もくれぬのだ。そのようなつまらぬ理由であれほど覚悟を決めた兵士は見繕えん」
　只でさえ今のルグニカは平和ボケしている。
　余程貧困に飢えた他国ならいざ知らず、一度でもこの平穏に浸かったことのある人間が、これを破壊しようと矛を取るのは不可能な話だとソフトクリームをぺろりと舐め取ってプリシラは言う。
「なら、何をやらかすつもりなのかねぇ」
「さてな。興味はないが、存外下らぬことかも知れぬし、この国の命運を掛けるものなのかも知れぬ」
　プリシラとアルは黄昏るように屋敷の方角を見る。

　この日、クルシュ・カルステンは王選候補者として大きな一手を打ち出そうとしていた。

「なにッ！この店ではリンガ飴なるものを取り扱っておるのか!?」
「……姫さん。後で買ってあげるから、こういう雰囲気は飲み込んでくれ」

想うということ

「――――どうだ。
自分はどれぐらい変わってみえる？」
「少なくともレムには外見に変化があったようには見えません」
早朝。青髪少女のレムはナツミ・シュバルツからの少し奇妙な問いかけに首を傾げながらも答えていた。
昨夜は酷くお疲れのようだったが、ラインハルト様と花を散らされてからはいつものように残業することもなく早めに就寝された。
不審な点といえば、先程ベッドメイキングをした際に小指ぐらいの血の跡が残っていたが、ラインハルト様が部屋を去られたのは入ってから一時間もしなかった。
身嗜みが崩れていた様子もなかったし、まさかその短時間で行為に及んだなんて事はないだろう。
「ですが、レムはナツミ様が少し変わったように見受けられます」
違和感と片付けられる小さなもの。中性的でどちらかと言えば男性よりだったナツミ様が少しだけ色気付いて見える。

いつもなら整えるだけだった化粧も、男性の目を意識して整えられているような気がした。
「うん。おう……そうか、これぐらいなら大丈夫かな」
「ナツミ様は」
「うん？」
「ナツミ様はあの男に好意を抱いているのですか？」
そんな相手とならば一人しか思い当たらない。
ナツミ・シュバルツの昔なじみであるユリウス・ユークリウスだ。
ラインハルトもナツミ・シュバルツと特に親しい異性に当たるが、彼に性欲の概念があるのかはレムの嗅覚を以てしても判別がつかない。それとは違いユリウスという男は不器用ながらもナツミ嬢を想う気持ちは全面的に押し出されている。
「全く、隠そうとしない否定的な顔だな。
レムはユリウスのことがそんなに嫌いか？」
ナツミ嬢の言うとおりレムはあの男が嫌い、もとい苦手だった。
「あのお方は危険です。あれほど濃い《魔女の残り香》を漂わせる人間が普通であるわけがありません」
それはレムが堪らなく嫌悪する魔女の匂いをユリウスが漂わせているから……。元

からなのか最近になってからなのかは分からないが、レムが初めて会った時には彼はレムの心の深い所の傷である魔女の残り香をむせ返るぐらい匂わせていた。
「その魔女の匂いってやつが私には分からないけど、大丈夫だ。イアがアイツと契約している内は下手な事は起きないって」
目線を合わせて自分ではなく心配するレムを安心させようとする穏やかな声。
やはりレムにとってナツミ・シュバルツは、善き主であり、多忙ながらに自分を気遣ってくれる尊敬すべき人だとレムは思う。
実の両親と重ねるつもりはないが、どんな小さなことでも褒めて、何もしなくても寄り添ってくれるナツミ様にレムは母性と不思議な充実感を覚えていた。
そんなナツミ様の肩や手に魔女の匂いをする者が気安く触れるのを見ると、また壊されるのではないかと身の毛がよだって仕方がない。腸が煮えくり返るとはまさにこの事だろう。
出来れば、あんな男と金輪際関わらないで欲しい。
それが出来ないのならレムがあの男を……。ナツミ嬢に嫌われたくないレムはその言葉を喉口手前で押し止める。
「念のため、フェリスやラインハルトに診させてもらったけど、異常はないって話だし、本人は自覚しているって話だ。

きっとアイツなりに動いた結果なんだろうよ。自分から話たくなるまで懐の広い心でお淑やかに待ってやるのが大和撫子ってもんじゃねぇか」

「…そうですね。出過ぎた真似を、申し訳ございません」

ポンポンと頭に手をおかれてレムは謝罪する。

「（公の場じゃないんだし、そんなに畏まらなくてもいいって言ってるんだけどな）」

ナツミ嬢はレムと完全に打ち解けるには時間が掛かりそうだと思いながら仕事へと出掛けた。